

---

# ジークフリート

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ジークフリート

### 【Nコード】

N9498N

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

森の奥でミーメに育てられる恐れを知らぬ若者ジークフリート。やがて彼は父の残した剣を見つけ。ニールングの指輪第二夜です。遂に作品の主人公が登場です。こちらにも掲載してもらっています。

<http://www.painwest.net/>

## 第一幕その一

舞台祝典劇ニールベルング

の指輪

第二夜　ジークフリ

ート

第一幕　恐れを知らぬ

若者

鬱蒼と茂った森の中。高い木々の下に様々な生き物達がおり森は何処までも続くかの様である。木の下にも草があり時折岩も見える。そんな緑の中にミーメがいた。相変わらず白衣を着ている。そしてかつて兄であるアルベリヒに虐げられていた時と同じく嘆いていた。

「何たる苦しみだ、無駄な苦勞だ」

「またばやいてるよ」

「そうだね」

小鳥や動物達はそんな彼を見てひそひそと彼等の言葉を話す。

「相変わらずだけれど」

「進歩がないね」

「わしの鍛えた最上の剣だというのに、巨人でさえ砕けないと思っただのにあいつは砕く」

「こう言っただけで頭を抱えている。」

「おもちゃみたいに真つ二つだ。あそこまで簡単にだ」

「確かにあれはね」

「凄いな」

「普通じゃないよ」

「どうやら動物達も小鳥も知っているらしい。」

「あの子の力はね」

「普通じゃないよ」

「ノートウングならどうにかなるかも知れんが」

ミーメはここで腕を組んで思索に入った。

「しかしわしでもあれを溶かし元に戻すことはできん。あの無鉄砲な奴にノートウングを鍛えて与えてやればわしを尊敬するようになるのだからうがな」

「無理だろうね」

「そうだね」

動物達は今の彼の言葉は否定した。

「この人じゃね」

「まずそれはないね」

「しかしじゃ」

ミーメはぼやき続ける。

「わしにはできん。できんことは他にはじゃ」

ここでさらにぼやくのだった。

「あの恐ろしいファフナーを倒せるのは。黄金とあの指輪を守っているあいつを倒せるのは」

ミーメのその小さな目が光った。

「あ奴だけじゃろうな。力だけでなく素早くもある。それに恐れを知らぬ」

その若者のことを言っているらしい。

「あ奴ならばのう。その為には」

目がさらに光った。

「ノートウングじゃ。あいつにノートウングを与えて」

「けれどね」

「そのノートウングがね」

「しかしわしですら無理だ、あの剣を鍛えるのは」

ミーメはここでまた嘆いた。その両手で己の頭を抱える。

「どうすればいいじゃ。あ奴はおまけにわしの剣を全て壊してしまふ。しかもそのうえでわしを罵る。やれへぼだの腕が悪いだのと」

「ホイホー……、ホイホー……！」

ここであった。森の奥から若い男の声が聞こえてきた。

「噛み付け、噛み付け！」

「うわっ！」

何とミーメのところに巨大な熊が出て来た。その上に精悍な若者が乗っていた。

顔は引き締まり若々しい。しかも端整であり口元には微笑みがある。青い目からは強い光を発している。髪は見事な金髪でそれを後ろに撫でつけたなびかせている。白い詰襟の軍服とズボン、そして黒いブーツである。その出で立ちの若者が熊の背にいた。

「こんな馬鹿な奴は食ってしまえ！」

「おい、止める！」

その熊をけしかけられたミーメは思わずその若者に言い返した。何とか熊から逃げようとしている。

「一体何をするんだ！」

「御前をやつつける為に連れて来たんだ」

若者は熊から飛び降りながら彼に告げた。その動きは実に軽やかである。高い熊の背から降りても何ともないといった感じである。

「いつも役に立たない剣ばかり作る御前をな」

「剣はまた作っておいたぞ」

ミーメはたまりかねた声で彼に告げる。熊に怯え木の上にあがったうえで言葉だ。

「だからその熊を追っ払ってくれ」

「剣をか」

「そうだ。だからその熊をだ」

「わかった。じゃあもういいぞ」

若者はミーメに対するのはうって変わって優しい顔と声で熊に告げた。

「御苦労だったな」

「何で生きてまま連れて来たんだ」

熊が去って行くのを見ながら若者に抗議する。何とか木から下り

る。その動きがどうにも猿に似ている。

## 第一幕その二

「全く」

「御前より役に立つからさ」

「こつ返す若者だった。」

「家に座ってるばかりで役に立たない剣ばかり作る御前よりな」

「ジークフリート、そんなことを言うのか」

「僕は聞いたんだよ」

「ここでその若者ジークフリートはミーメに対して告げるのだった。」

「深い森の中でね」

「この森でか」

「何かの囁きを」

「笑いながら彼に告げる。」

「そしてその誘うままに角笛を吹くと」

「あの熊が来たというのか」

「友を呼んだのさ」

「高らかな声での言葉だった。」

「そして藪の中から出て来たのがあの熊だったんだ」

「あの熊がか」

「そうさ。僕はあの熊が気に入ったんだ」

「笑みはそのままである。」

「御前なんかよりずっとな」

「何でまたいつもわしにそんなことを言うんだ」

「じゃあ役に立つ剣を作れ」

「ジークフリートは彼には容赦がない。」

「いいな、役に立つ剣をだ」

「それなら一本作っておいた」

「先程言ったその剣のことだ。」

「それを使え」

「これか」

見れば岩の上に一本の剣があった。白銀の光を放つ如何にも鋭そ  
うな剣である。

「これがそうなんだな」

「そうだ。今度は御前の力でも折れはしない」

ミーメは胸を張って言う。

「決してな」

「それじゃあ」

ジークフリートはまずその剣を手に持ってみた。そのうえで大き  
く一振りする。するとだった。

何とそれだけで剣は粉々になってしまったのだ。一瞬であった。

「何と、この剣も」

「また駄目だったじゃないか」

ジークフリートはその粉々になった剣を後ろに放り捨ててミーメ  
に告げた。

「何だい、やっぱり御前はへぼじゃないか」

「わしをへぼだというのか」

「そうだ、大法螺吹きだ」

こうまで言う。

「それでよく巨人だの激しい戦いだの勇敢な行動だの言えるな」

「それはわしが悪いのではない」

「あと熟練した守りだったな」

ジークフリートの言葉は続く。

「偉そうに言うが僕の剣一本作れないじゃないか」

「それは御前の力が強過ぎるからだ」

ミーメはそれを話に出した。

「そもそも何だ、さっきの振りの強さと速さは」

「僕は普通の力と速さしかないよ」

「いや、それは違う」

ミーメはさらに抗議する。



「御前の力はだ」

「そんなに言うのなら僕が使える剣を作れ」  
とにかくそれを言うジークフリートだった。

「いいな、それは」

「何と恩知らずな奴だ」

ミーメはここでもたまりかねて言った。

「そもそもな。御前はだ」

「何だっというんだ？」

「わしが育ててるんだぞ」

このことを言ってきたのである。

「このわしがだ」

「恩を着せるつもりか？」

「そう思うのならそう思え」

ミーメも流石に頭にきていた。

「御前にいつも色々としてやってるだろうに」

「してやっているか」

「そうだ」

怒った声で返す。

「いつも優しくして親切にしているな」

「そうだったか？」

「それを忘れたのか？親切にしてくれている相手には喜んで恩を返してだな」

「僕はそんなことを感じたことはない」

あくまでこう言うジークフリートであった。

### 第一幕その三

「全くな」

「全くだというのか」

「そうだ、僕は何でも自分でやる」

「とりあえずはじゃ」

そんなジークフリートにまた言うミーメだった。言いながらあるものを出してきた。見ればそれは。

「食え」

「肉か」

「御前の為に焼いたのだぞ」

こつ言いながら鉄串に串刺しにした肉の塊を出してきたのである。

「御前の為に焼いたのだからな」

「僕の為にだつていうんだな？」

「そうだ。食え」

また彼に告げる。

「何なら煮たものもいいか？それもあるぞ」

「それなら御前が食べる」

しかしジークフリートは彼の好意と見えるものにも素っ気無い。

「僕は自分で焼いて食べる」

「可愛がつてやった仕打ちがこれか」

またたまりかねた声を出すミーメであった。

「世話をしてやっているのにな」

「まだ言っているのか」

ジークフリートはその間に自分で肉を焼きはじめていた。

「そんなことを」

「いいか、わしは御前を赤ん坊の頃から育てているのだぞ」

「そついえば気付いた時には一緒にいたな」

「そつだろつ？いつも育ててたんだぞ」

このことを強調してみせてきたのだった。

「温かい服を着せて食べ物と飲み物をやり」

「これか」

言いながら側にあつた葡萄酒を口に含む。

「そつえば食べるものと飲むものはいつもあつたな」

「それを手に入れるのも大変なのじゃぞ」

恩着せがましく彼に告げていく。

「大きくなつても今みたいにだ」

「世話をしているというのか」

「寢床だつてあるじゃないか」

今度言うのはそれだった。

「おかげで気持ちよく寝られるだろう」

「僕は何処でも寝られるんだだけだな」

「それにおもちやを作つてやつて角笛だつて作つてやつた」

今その角笛は彼の腰にある。その角笛を見ながらの言葉だった。

「それだつてな」

「頼んだ覚えはないけれどな」

言いながら焼けた肉にかぶりつく。強い仕草で引き千切つて口の

中に入れる。

そして嘔みながら。ミーメの話をとりあえず聞いていた。

「僕はな」

「色々なことを教えてやつた。文字だつてな」

見ればあちこちにルーン文字もある。

「思慮深い言葉も教えたしわしの知つていることを全て教えた」

「まあそれはね」

「何か一つ欠けてる気がするけれど」

ここで動物達が言った。

「それは何かな」

「ちよつとわからないけれど」

「御前が遊び回っている時にわしが汗水流して作つたりしていたの

だぞ」

「だから頼んだ覚えはない」

「この苦勞の報いが思いやりのない御前からの仕打ちだ。何ということだ」

「では言おうか」

肉を食べながらここで彼に顔を向けてきたジークフリートだった。

「僕からも」

「何だ？」

「確かに御前には色々教えてもらった」

彼もそれは認める。

「しかし。一つだけ覚えられないことがあるんだ」

「それは何だ？」

「御前に対して我慢するということだ」

目を怒らせての言葉だった。

「それだけではない」

「わしに対してか」

「御前が僕に何をしても頭に来る。御前が側にいるだけでなんだ」

「それだけでだというのか」

「そうだ、それだけでだ」

こつ言いながらミーメを見る目をさらに怒らせていく。

「やること為すことをだ。何でなんだ？」

「まあそうだろうね」

「それは見ていればわかるよ」

動物達は今のジークフリートの言葉に頷く。

「すぐにね」

「一目瞭然だよ」

「しかしだ」

ここで言葉を換えるジークフリートだった。

## 第一幕その四

「それでも僕は御前のところに帰ってくる」

「わしのところにじゃな」

「そうだ。どうしてなんだ？」

半分怒った声でミーメを問い詰めだしてきた。

「御前より森の動物達や鳥や小河の魚達の方が親しめるのにだ」

「ああ、それはじゃ」

「わかるのか？」

「そうだ、わかるぞ」

「ならすぐに教える」

長身であった。それで完全にニールング族であるミーメを見下ろしていた。ミーメも顔をあげてそのうえで彼に対して応えていた。

「いいな。それはどうしてなんだ？」

「それは簡単じゃよ」

ミーメはにこにこことしてみせて彼に応えた。

「御前が本当はわしを好いておるからじゃ」

「ふざけるな！」

今の言葉にははっきりと怒りを見せたジークフリートだった。

「僕は御前に我慢ができないんだぞ」

「そうは言ってもじゃよ」

それでも言い返すミーメはさらにこう言ってみせた。

「その通りなのじゃからな」

「根拠は何だ、それの」

「まずは静かにするのじゃ」

一旦ジークフリートを大人しくさせることにした。

「よいか、それでじゃ」

「聞いてやる、何だ？」

「御前は乱暴に過ぎる」

「このことを嗜めるのだった。」

「もう少し大人しくなつてじゃ」

「それではなしを聞けというのか？」

「そうじゃ。それでじゃ」

「わかつた。聞いてやる」

とはいつてもジークフリートの態度はぞんざいなままである。岩の上に腰をどっかりと下ろしてそのうえで肉と酒を口の中に入れてながら話を聞くのだった。

「それでどうなんだ？」

「若者は悲しい時には古巣を恋しく思うものじゃ」

「古巣をか」

「そうじゃ。恋しく思うといふことは愛しているといふことじゃよ  
優しい声をわざと出してみせている

「だから御前はわしのところに戻つて来てじゃ」

「僕がか」

「そうじゃ。それで御前はわしを愛しているといふことになるのじ  
ゃ」

「こつ話すのであつた。」

「いや、愛さなくてはいけないのじゃ」

「愛さなくては!？」

「わしは親なのじゃよ」

「このことを強調してみせるのだった。」

「親鳥が巢の中で雛を養う様にわしは御前の面倒をずっと見てやつ  
たのじゃよ」

「よくそんなことが言えるものだ」

ジークフリートはここまで聞いて如何にも不服そうに返した。

「何てずる賢い奴だ」

「ずる賢いというのか」

「そうだ。そのずる賢い御前にもう一つ聞きたいことがあるんだ」

「それは何じゃ？」

「春になると」  
「こう前置きしてからの言葉だった。」  
「貼るには小鳥達は喜びに溢れてさえずっている」  
「私達のことね」  
「そうだね」  
その小鳥達が彼の話の話を聞いて言い合う。  
「それを言うなんて」  
「見てるわね、あの子」  
「一羽の鳥がもう一羽を誘っている」  
「それがどうしたのじゃ？」  
「御前は僕にあれば雄と雌だと言ったな」  
「その通りじゃ」  
このことは記憶にあったのですぐに答えられた。  
「そんなことか」  
「そんなことかじゃない」  
ジークフリートは食べながらさらに言う。  
「とても愛し合いお互いに離れない。巣を作ってその中で卵を抱いている」  
「それが嘗みじゃよ」  
「じきに雛は羽根をはたかせて飛び立つ」  
ジークフリートはさらに言う。  
「つがいの小鳥達は一生懸命雛を育てる。それは鹿も同じだった」  
「全ての動物じゃがな」  
「そうだ。狐や狼も同じだ」  
彼等もだというのだ。  
「雄は餌を巣に運んで雌は子供に乳を飲ませる」  
「それがどうしたのじゃ」  
「僕はそこでわかったんだ」  
ジークフリートのその声が強いものになった。

## 第一幕その五

「愛とはどんなものかを」

「愛とはか」

「そうだ。僕はいつもそれをじっと見ていた」  
「子供が育つのを最後までというのだ。」

「僕の母さんは何処にいるんだ、その母親は」  
「御前は馬鹿か」

話を聞き終えたまずはこう返したミーメだった。

「御前は何を考えておるのじゃ」

「何だと？」

「いいか、御前は鳥でも獣でもないのじゃぞ」  
「このことを彼に告げる。」

「それで僕を育てたっていうのか」  
「そうじゃ」

「では僕の母親は誰なんだ？」

またこのことを問うジークフリートだった。

「それを聞いているんだ」

「わしが全てなのじゃよ」

こう返すミーメだった。

「わしが御前の父であり母なのじゃ」

「嘘をつけ」

それを全力で否定するジークフリートだった。

「そんなことがあるものか！」

「何故嘘だというのじゃ？」

「子供は親に似るものなんだ」

ジークフリートのその声が強いものになる。

「僕は幸いそれを見たんだ、小河で自分の顔を」

「御前の顔をか」



「動物達や美しい太陽や雲も一緒にだ」

「見たのじゃな」

「僕と御前は何一つ似ていない」

ミーメのそのお世辞にも美しいとは言えない顔を見ながらの言葉だった。

「そう、全くだ」

「またそんな馬鹿なことを言う」

「馬鹿なことじゃない」

ミーメの言葉を否定してみせた。

「もうわかってきたんだ。僕と御前が似ていないということが」

「別だというのか？」

「そうだ」

まさにその通りだというのだった。

「そして僕の父親と母親が誰か。今日はそれを聞き出してやる」

「そんなことはどうでもいいことだ」

「いいわけがない」

その声がさらに荒いものになった。

「何があっても聞かぬぞ。御前の作った剣を全て壊すこの力を使っても」

「暴力を振るうのか」

「この場合は別だ」

食べ終わり飲み終わった。いよいよだった。

「いいな、何があってもだ」

「わかったわかった」

暴力と聞いて遂に折れたミーメだった。

「わしは頭はいいが力は弱いじゃ」

「ふん、やつとわかったか」

「わかったわい」

渋々とした顔で頷いての言葉だった。

「本当にのう」

「それで何なんだ？」

「何故御前がわしを嫌うのかじゃが」

「その理由をか」

「そうじゃ。言うわ」

苦い顔での言葉であった。

「わしは御前の親父でもなければ親戚でもない」

「やっぱりそうなんだな」

「しかし御前はわしのおかげで育ったんだぞ」

それでもこのことを強く言うのだった。

「それは事実じゃ」

「それはか」

「そうじゃ。わしは御前のたった一人の友人じゃ」

「そう思ったことは一度もない」

「そしてそれと共に全くの他人じゃ」

このことも認めるしかなかった。

「御前に同情して助けてやったのに。これでは」

「それでどうなんだ？知っていることを話せ」

「わかつておるわ」

前置きはいいというのだった。

## 第一幕その六

「それでは話すぞ」

「ああ。それでどうしてなんだ？」

ジークフリートはじつと彼の話を聞こうとしてきた。

「僕はどうしてここに御前と一緒にいてそして母さんは」

「昔のことじゃった」

ミーメはその記憶から話をはじめた。

「この森に一人の女が来た」

「女!？」

「雌と考えるのじゃ」

森の生き物と自分しか知らない彼にわかりやすく話した。

「それがこの森に来たのじゃよ」

「雌……女がが」

「人間の女がじゃ」

「人間というと僕と同じか」

「そうじゃ」

このこともジークフリートに話をした。

「実はわしはニールング族で御前は人間なのじゃよ」

「そうだったのか。やっぱり僕と御前は」

「そういうことじゃ。わしは小人じゃ」

今彼にこの事実をはじめて教えた。

「御前とはそこからして違ったのじゃ」

「そうか、それで僕と御前は」

「左様。では話を続けるぞ」

「ああ」

「その人間の女が呻きながら倒れているのを見てじゃ」

「どうしたんだ？」

身を乗り出して問うた。

「それで」  
「ここに運んで助けたのじゃ」  
「助けたのか」  
「その女はすぐに死んでしまった」  
「ミーメは俯いて悲しげな声で答えた。」  
「御前を産んですぐにじゃ」  
「僕を産んですぐに」  
「そうじゃ、それで死んでしまったのじゃ」  
「こつ話すのだった。」  
「それでじゃ」  
「僕を産んでか」  
「うむ」  
「それじゃあ僕のせいで」  
それを聞いてジークフリートは悲しい顔になった。  
「母さんは」  
「母さんはわしに御前を頼むと言って死んだ」  
声は自然にしんみりとしたものになっていた。  
「そういうことなのじゃよ」  
「そうだったのか」  
「それでそれからはわしが」  
「それはもう聞いた」  
恩着せがましい話はもう言わせなかった。  
「それで次は」  
「次は何じゃ？」  
「僕の名前のことだ」  
このことを問うというのだ。  
「僕の名前はジークフリートだな」  
「それがどうかしたのか？」  
「何故この名前なんだ？」  
「それは御前の母さんがわしに言ったのじゃよ」

「その母さんがか」  
「そうじゃ。このことも話そう」  
ジークフリートを見ながら話す。  
「ジークフリートという名前なら御前は強く美しくなるだろうと言  
つてな」  
「母さんが名付けてくれたのか」  
「そういうことじゃ」  
「そうか。じゃあ次は」  
「まだ聞くのか」  
「そうだ、聞く」  
「たまりかねた調子になったミーメにさらに問うのだった。  
「今度はその母さんのことだ」  
「御前の母親のことか」  
「名前は何と叫んだ？」  
「何と言ったかな」  
「そう言われると覚えていない。首を捻るのだった。」  
「それは」  
「覚えてないのか」  
「いや、待て」  
「こつ前置きするのだった。」  
「思い出した。それでなのじゃが」  
「何て名前なんだ？」  
「一度だけ名前を自分から言ってくれた」  
「それでその名前は」  
「確かジークリンデと叫んだ」  
「こつ話したのだった。」  
「それはな」  
「ジークリンデと叫ぶのか」  
「そうじゃった。確か」  
「そうだったのか。ジークリンデか」

その名を聞いて自分も俯いたジークフリートだった。

## 第一幕その七

「それが母さんの名前か」

「これでよいな」

「もう一つ聞きたいことができた」

ところがまた顔をあげるジークフリートだった。

「いいか」

「もう言えることはないぞ」

「いや、ある」

そう言ってさらに問うのだった。

「聞きたいことはまだある」

「ではそれは何じゃ？」

「父さんのことだ」

次に聞くのはこのことだった。

「御前が僕の親じゃないことはわかった」

「うむ」

「それなら父さんもいる。それは誰なんだ？」

「それには会ったこともない」

お手上げといった動作で応えるミーメだった。

「生憎じゃがな」

「母さんは何も言わなかったか？」

「殺されたとか言っていたのう」

腕を組み首を捻りながら記憶を取り出した。

「そういえばじゃ」

「殺されたのか」

「それでじゃ」

ここでたまたま自分の横にあった折れた剣を出してきた。見事に横で真つ二つになっている。

「この剣じゃが」

「ずっと前からあるその折れた剣だな」  
「そうじゃ。これじゃが」  
また話すミーメだった。  
「その父親が持っていたというのじゃ」  
「父さんの……」  
「その御前の母親が言っておった。最後の戦いで使っておったと」  
「じゃあこれが父さんの形見なんだな」  
「そうなるのう」  
よくわからないといった調子のミーメだった。  
「よくは知らんのじゃがな」  
「そうだったのか」  
「そうじゃ。知らんのじゃ」  
今度は正直に言うのだった、  
「わしが知っているのはここまでじゃよ」  
「ならミーメ」  
ここでジークフリートは身を乗り出してきた。  
「御前に言いたいことがある」  
「もう本当に何も知らんぞ」  
「知っていることじゃない」  
それは否定するのだった。  
「いいか、その折れた剣じゃが」  
「どうするとうのじゃ？」  
「その剣を元に戻してくれ」  
「うう言うのだった。」  
「いいな、すぐにじゃ」  
「この剣をか」  
「そうだ」  
言葉はさらに強いものになった。  
「その折れた剣だけを信じられる」  
「どづういことじゃ、それは」



「いいか、すぐに元に戻すんだ」  
有無を言わせぬ口調だった。  
「わかったな、今日中にだ」  
「今日中だというのか」  
「そうだ、そして」  
語るその目が明るいものになっていた。  
「この森から出て世の中に出るんだ」  
「世の中じゃと」  
「御前から離れて自由になるんだ」  
立ち上がったの言葉だった。  
「その為にもだ、いいな」  
「おい、待て」  
何処かに行こうとするジークフリートを呼び止める。  
「一体何処に行くんだ」  
「少し出て来る」  
こう言って去るジークフリートだった。  
「それじゃあその間に元に戻しておくんだ、いいな」  
「一体何なのじゃ」  
突拍子もない彼の行動に今は困惑するしかない彼だった。  
「あいつは。本当に」  
「しゃがみ込んでまた不平を言う。」

## 第一幕その八

「あいつにはあの化け物を倒してもらわないとならないのにおう。  
しかもじゃ」

次はその折れた剣を忌々しげに見るのだった。

「この折れた剣だけはどうにもならん。何なのぞた」

「もし」

するとだった。また人間の声がしてきた。

「宜しいかな」

「誰じゃ？」

ふと声がした方を振り向くとそこには人間らしき男がいた。唾の  
広い帽子を目深に被り顔の右の部分を隠している。その顔の左半分  
は引き締まり見事な髭がある。左手に槍を持ち古ぼけた濃い灰色の  
マントを羽織っている。着ている服はマントと同じ色の軍服であっ  
た。

その男が来てだった。ミーメに声をかけてきたのだ。

「旅に疲れた者を休ませてくれないか」

「この森に来たというのか」

「そうだが」

「珍しいというものではないな」

ミーメはその旅人を見て目を顰めさせた。

「こんな深い森に人が来るというのは」

「さすらい人と言われている」

旅人はこう名乗ってきた。

「遠くまで旅にさすらい地上のあらゆる場所を巡ってきた」

「さすらい人というのならここに留まることはないだろう」

まずはこう冷たく返したミーメだった。

「すぐに何処かに行くといい」

「そうはいかん」

しかしさすらい人はこう彼に返した。  
「わしに不親切にするとじゃ」  
「何があるというのじゃ？」  
「禍があると言われている」  
半ば脅しの言葉であつた。  
「それだけでな」  
「旅人に冷たくすればということか」  
「そう考えてもらつてもいい」  
「こつも返したさすらい人だつた。」  
「とにかくだ。善意をもらいたい」  
「わしはいつも禍を受けておる」  
ジークフリートのことである。  
「そのわしに禍をさらにといつのか」  
「善意には知識で返そう」  
さすらい人は交換条件を提示してきた。  
「わしはあらゆる場所を巡り多くのことを見てきたからだ」  
「知識をか」  
「心の痛みを取り除くこともできるが」  
「生憎わしはそんなことには興味がない」  
しかし彼はこう返すのだった。  
「一人でいたいんだ。あんたは別にいい」  
「大抵の者は自分が利巧だと思つてているが」  
さすらい人は聞かれる前に述べてきた。  
「実は一番知らなければならぬことを全く知らないのだ」  
「そつだといつのか」  
「そつだ。そしてだ」  
彼はさらに言うのだった。  
「その人に役立つことをわしは質問させる」  
「質問をか」  
「そつしてもてなしの礼に応えるのだ」

「多くの者は無用な知識を有り難がるがじゃ」

ミーメも負けてはいなかった。

「わしは必要なことは知っておる」

「知っているというのか」

「そうじゃ。だから充分だ」

「ここでも冷たく返すのだった。

「だからあんたに用はないのじゃ」

「まあそう言うな」

「ここまで聞いても冷たいままの彼だった。

「そんなことはな」

「おい、待て」

「いいではないか」

さすらい人は強引に岩の上に腰を下ろしてしまった。ミーメが止めてもだ。

「別にな」

「何という図々しい奴だ」

「それでだが」

「何だ？」

「余興を考えた」

こう彼に言ってきたのである。

## 第一幕その九

「面白い余興をな」

「余興だと?」

「そうだ。余興だ」

またミーメに告げた。

「わしの首を賭けよう」

「首を?」

「知恵比べにな」

「わしと知恵比べをするというのか」

「そうじゃ。御前に役立つことを御前がわしに質問してもわからなかつたり」

「こつ言つのがつた。」

「わしの知恵が足りなかつたらわしの首は御前のものだ」

「そうするといふのか」

「それでどうじゃ」

「何なのだこいつは」

ミーメはいい加減そのさすらい人に恐怖を感じだしていた。

「不気味な奴だ。それではじゃ」

彼は言ふのがつた。

「こいつがわからないような話を聞いてやったじゃ。よし」

「それでどうするのだ?」

「それに乗つた」

「賭けるのだな」

「うむ、用心深く答えるのじゃな」

さすらい人に顔を向けて指差したうえで念を押してみせた。

「質問を三回するからな」

「三回答えよといふのだな」

「そうじゃ。どうやらあんたは」

さすらい人を警戒する顔で彼に告げた。

「この地上を随分沢山歩き回ったのじゃな」

「その通りだ」

「この世の中を広く旅したのなら知っておるだろう」

「ではまずは何を聞くのだ？」

「地下に住んでいるのは何じゃ？」

このことを彼に問うのだった。

「その種族は」

「地下の深い場所にいるのは」

彼の問いにさすらい人はゆっくりと答えてきた。

「ニーベルハイムが彼等の国だ」

「その国がか」

「彼等は黒いアルプでかつてはアルベリヒがその王だった」

「アルベリヒ」

その名前を聞いて暗い顔になったミーメだった。

「あいつの名前まで」

「あの男は魔法の指の力でニーベルングの者達を好き勝手に働らか

せていた」

「そのことまで知っているのか」

「数え切れぬまでの光り輝く財宝を積み上げさせてこの世を支配し

ようとした」

「そこまで知っているのか」

「これでよいか」

「ここまで話したのだった。」

「これで」

「いいだろう」

ミーメも渋々ながらそれを認めた。

「わかった」

「では二番目の質問だな」

さすらい人の方から言ってきた。

「それだな」

「それが」

「次は何を聞くのだ？」

「大地の背のことだ」

「地上か」

「まず人間達がいる」

彼等のことをまず述べた。

「そしてその他には誰がいるのだ？」

「地上には人間達の他に巨人族がいる」

彼等だと答えるのだ。

「彼等はリーゼンハイムという国にいる」

「その国にだな」

「そう、そして」

彼はさらに話してきた。

「その国の主は二人いた」

「二人か」

「ファゾルトとファフナーの兄弟だ」

彼等だというのである。

「彼等はニーベルングの宝を羨みその莫大な宝を手に入れた」

「うむ」

「その時に指輪も手に入れた」

「指輪のことも知っているのか」

「しかしだ」

今のミーメの言葉には応えずにさらに言ってみせてきていた。

「その指輪を巡って彼らは争い」

「そして」

「ファゾルトは倒れファフナーは竜となりある洞窟で財宝を守っている」

さすらい人は言いながら森の奥に顔を向けてみせた。ミーメはその仕草を見て内心ギクリともなった。

## 第一幕その十

「そうなっているのだ」

「そうか」

「これでいいか」

「ここまで話してまたミーメに問うた。

「この話は」

「うむ、それでいい」

彼の言葉に真剣な面持ちで頷くミーメであった。

「わかった」

「それでは三番目だな」

「それだが」

それを受けて話してきたミーメだった。

「次には天界のことを聞きたい」

「そこなのだな」

「そうだ、天界はどうなっている」

「それが三つ目の質問だな」

さすらい人はこのことをミーメに確認するのだった。

「それでいいな」

「それでいい」

そしてミーメもそれでいいと答えた。

「それでどうなのだ、天界は」

「天界には神々がいる」

さすらい人は答えはじめた、

「彼等の城はヴァルハラといい」

「あの城か」

「そうだ、天に浮かぶ高貴な城だ」

さすらい人はヴァルハラをこう評した。

「そして彼等は光の精である」



「光か」

「そして光のアルベリヒなるヴォータンがだ」

「ここでは自嘲めいたものも含まれていた。」

「彼等を治め世界のトネリコという大樹から」

「ユグドラシルだな」

「知っているのか」

「聞いてはいる」

「ミーメもそれは知っているのであった。」

「世界の中心に生えているあの大樹のことはだ」

「では言おう。その大樹のもつとも神聖な枝からだ」

「そのヴォータンは何をしたのか」

「一本の槍を作った」

彼は語ると共にその左手の槍も見た。

「その槍はだ」

「どうだというのだ？」

「大樹が枯れても損なわれることはない」

「ここでまた槍を見るのであった。」

「ヴォータンはその槍の穂先で世界を治めているのだ」

「世界をだな」

「そうだ。聖なる契約を示すルーンという言葉によって」

「それによってだな」

「彼はその文字を槍の柄に刻んでいるのだ」

「ミーメはここで見た。その槍を。」

遠目ではあったがそこにあつたものは。

「やはり」

「ヴォータンの拳が握っているこの槍を動かす者は」

「ミーメが槍を見るその間にも彼の言葉は続く。」

「世界の支えを手にすることができる」

「世界を」

「ニーベルングの一族も彼には屈し巨人達も彼の言葉には従う」

「誰もがか」

「そうだ、誰もがだ」

さすらい人の言葉は何時しか峻厳なものになっていた。

「彼等全ては永遠にその槍を持った者に従う」

「永遠に」

ミーメは彼の言葉に息を飲んでしまった。

「従うだと」

「そうだ、この槍を持った者にだ」

突風が起こった。嵐の様な。それで彼は一旦言葉をとぎってみせたのだった。

しかし暫く時間を置いてから。彼はミーメに対して問うてきた。

「では賢い小人よ」

「わしのことか」

「そうだ。答えてくれ」

ミーメを見据えながらの言葉であった。

「私は質問に答えられたか。私はもう自由なのか」

「そうだ、自由だ」

ミーメは恐れをなしながら彼に答えた。

「だからもう行くといい、すぐにだ」

「御前はもつと役に立つことを聞くべきだった」

さすらい人は立ち去ろうともせず彼に告げてきた。

## 第一幕その十一

「そういう知識を与える為に私は首を賭けたのだ」

「必要な知識か」

「そうだ」

「そうだというのである。」

「御前は何が自分の役に立つのかわかっていないな」

「わかっていないだと」

「それではだ」

「今度は彼から言ってきたのであった。」

「今度は御前の首を賭けに出してもらおうか」

「何だと!？」

「御前のもてなしはよかったとは言えない」

「これは皮肉であった。」

「だが炉辺の暖かさを貰う為に私は首を賭けたのだから」

「わしもだというのか」

「そうだ。次は御前だ」

「またしても有無を言わせぬ口調であった。小さなミーメはそこから逃れられなかった。」

「御前が答える番だ」

「わしだというのか」

「さあ、どうなのだ」

「彼はミーメに対して問うてきた。」

「三つの問いに答えられるのか」

「わしに知らないことはない」

「ミーメは怯みながらもそれでも虚勢を見せはした。」

「それこそな。わしはニーベルング族で随一の賢人と言われてきたのじゃ」

「では答えられるな」

「この世にあるものならば」

「では問おう」

こうして今度はさすらい人がミーメに問うのであった。

「ヴォータンが厳しく扱いながらも最も愛している一族は何か」

「英雄の一族については詳しくはない」

しかし名前は出せたのだった。

「しかしその質問には答えられる」

「そうか」

「ヴェルズングの一族はヴォータンが人の女との間に作った一族であり」

彼はそのことを知っていたのだった。

「そして彼が辛くあたってももつとも愛されている希望の一族なのだ」

「彼にとつてはだな」

「そうだ。その中の兄妹であるジークムントとジークリンデは」

先程ジークフリートに告げた名前が出されていた。

「絶望に陥れられた双子の夫婦だった」

「その者達のことを知っているのか」

「彼等はヴェルズングの中でもっとも強き英雄を生んだ」

「その名は？」

「ジークフリート」

こう答えるのだった。

「それがその英雄の名だ」

「わかった」

「これでいいか」

ここまで答えたうえでさすらい人に対して問い返した。

「わしは無事か」

「御前の返答は全て正しかった」

これがさすらい人の回答だった。

「まずはいいでしょう」

「そうか」

「そしてだ」

すぐにであった。こう彼に言ってきたのである。

「第二の質問だ」

「うむ」

「そしてそのジークフリートをだ」

「その英雄のことが」

「そうだ、彼だ」

ジークフリートのことだというのである。

「一人の賢いニールングがジークフリートを育てているな」

「それがどうした」

「彼はジークフリートに竜を倒させ」

既にそれを見抜いているのだった。

「指輪を手に入れ財宝の持ち主になろうとしている」

「忌々しい奴だ」

ミーメは話を聞いていて舌打ちせずにはいらなかった。

「やはり全て見抜いているのか、こいつは」

「その為にだ」

さすらい人はミーメの舌打ちをよそにまた言っただった。

「ジークフリートはどの剣を持たなければならぬのか」

「ノートウングだ」

それだと返すミーメだった。

「誰もが手に入れたいと望むものだ」

「そのノートウングをだな」

「そうだ、その剣をだ」

はつきりと答えはしたが顔は忌々しげなものであった。

## 第一幕その十二

「ヴォータンはかつてその剣を一本のトネリコの幹に突き刺した」

「そうだったな」

「そうだ、我等にとっては少し前の話だ」

既に相手のことは完全にわかっているのだった。

「それを幹から引き抜いた者こそがだ」

「何だというのだ？」

「その持ち主となるべき者だった」

言葉は過去形であった。

「だがどんな勇者も抜けなかったが一人がそれを果たした」

「その者は誰だ？」

「それこそがジークムントだった」

言葉はここでも過去形だった。

「彼は戦いにそれを携えて行ったが剣はヴォータンの槍が砕かれた」

「砕かれたか」

「今はその欠片を一人の鍛冶屋が持っている」

自分だとはあえて言わない。

「勇敢で愚かな若者ジークフリートがだ」

「あの若者がか」

「そうだ。あの若者が竜を倒す時に」

その時だという。

「その剣だけが役に立つということを彼は知っているのだ」

「その時にか」

「そうだ、彼がだ」

あえて誰とはここでは言わなかった。

「彼はだ」

「わかった」

「これでいいのだな」

「そうだ。御前の首は保たれた」  
「こうミーメに告げるさすらい人だった」  
「それは私が保障しよう」  
「そうか」  
「御前は賢い者の中でもとりわけ賢い」  
彼は言った。  
「御前の賢さには誰も適うまい」  
「褒めても何も出ないぞ」  
「貰う必要もない。そうだな」  
言葉はここで皮肉なものになってきた。  
「その若者を小人の為に利用しようとは。賢いものだ」  
「ふん、誰のことだ」  
「わかっていると思うがな。それでだ」  
彼はここでまた言ってみせてきた。  
「三番目の質問だ」  
「最後だな」  
「そうだ、最後だ」  
このことは強く保障してみせた彼だった。  
「それは言っておこう」  
「では何だ？」  
問う彼の顔はいよいよ強張ってきていた。  
「その最後の問いは」  
「誰が鍛えるのか」  
彼がミーメに問うたのはこのことだった。  
「誰がその欠片になっている剣を鍛えるのだ」  
「少なくともわしではない」  
彼はこれ以上になく忌々しげに答えた。  
「わしではないのだ」  
「御前ではないというのだな」  
「そうだ、わしではない」

彼はまた言った。

「わしではとても鍛えられない。どうにもならない」

「では他の者か」

「誰なのか、それは」

彼は首を横に振った。

「しかしわしではないのは確かだ」

「曖昧な返答だな」

「では首はないというのか？」

「いや、それでいい」

しかしさすらい人はここでは大人しかった。

「その返答でいいのだ」

「その言葉嘘ではないな」

「嘘ではない」

また答える彼だった。



## 第一幕その十三

「それもまた保障しよう」

「そうか」

「御前は三回質問し私は三度答えた」

先程のことを言ってきたのである。

「つまらない関係のないようなことだったが」

「ふん、そう思いたいのなら思うがいい」

「御前の一番身近にあること、役に立つことはだ」

「それをか」

「そうだ、それを聞かなかった」

こつ彼に告げるのだった。

「だが私がそれを言い当てればだ」

「どうだというのだ？」

「御前は気が触れるであろう」

笑いもせずに彼に告げてきた。

「必ずな」

「そう言うのか」

「言えると答えよう」

そうだというのである。

「少なくとも私はこの頭を勝ち取り」

「元々興味もなかったがな」

「そして御前も少なくとも今は生き延びた」

「このまま永遠に生き延びてみせるさ」

「その知恵に敬意を表してだ」

彼は言うのだった。

「竜を倒す勇敢な人間は誰か」

「人間なのだな」

「そうだ、今は生き延びている小人よ、よく聞くのだ」

言葉は予言めいたものになっていた。

「恐れを知らぬ者だけがそれをできるのだ」

「竜を倒すことをか」

「そしてノートウングを鍛えることができるのだ」

彼は告げた。

「そしてその人間に御前の頭を委ねよう」

「わしは助かった筈だぞ」

「今はな」

妙に思わせぶりな言葉であった。

「今は確かにそうだ」

「何度も言うがこれからもだ」

「ではそうなるように気を保っておけ」

既に何もかもを見透かしたが如き言葉を彼に告げた。

「それを伝えておこう」

ここまで言うのと立ち上がりその場を去った。ミーメだけが残っていた。彼はまだ忌々しげに思っていた。しかしここでジークフリートが戻って来たのであった。

「御前か」

「おい怠け者」

いきなりこう言っただけで彼を罵ってきた。

「剣はできたのか？」

「まだだでは何をしていたんだ？」

「客が来た」

「こう彼に答えるのだった。」

「その相手をしていた」

「客！？熊か狼かい？」

「どちらでもない。人間だと思っておけ」

「僕と同じなのか」

「そうだな。同じだな」

ジークフリートを見ながら忌々しげに答えるミーメであった。

「残念なことじゃがな」  
「僕にとつては御前と一緒にいる方がずっと残念だ」  
ジークフリートの態度は相変わらずであった。  
「それで剣はまだなのか」  
「恐れを知らない者だけができるのだ」  
先程のさすらい人とのやり取りでの言葉であった。  
「そいつだけがだ」  
「恐れを知らない者か」  
「ついでにそいつはわしの首も手に入れている」  
「じゃあさつさと首をくくるのだな」  
「そこまで言うのか」  
「少なくとも僕は御前の首なんかは何の興味もないんだ」  
ジークフリートの返答も忌々しげなものだった。  
「全くな」  
「では何なのじゃ」  
「それで何なんだ」  
お互いに言い返す状況になった。  
「わかりやすいように説明してくれ」  
「待てよ」  
「ここでミーメは思った。」

## 第一幕その十四

「こいつに恐れを教えればだ」

「何をぶつぶつ言っているんだ」

「そうすればいいのじゃ」

彼はこのことに気付いた。

「そうすればわしの首は安泰じゃ。愛することを教えなくてもよかつたのじゃ」

「それでミーメ、一体何を言っているんだ」

「御前のごとじゃよ」

ジークフリートも顔を向けて答えた。

「御前のことを考えておつたのじゃよ」

「僕のことだつて？」

「そうじゃ」

こつ答えてみせるのだった。

「御前のことをじゃ」

「僕の何について考えていたんだ」

「わしは恐れを知っている」

まずはこのことを告げた。

「しかし御前はそれを知らん」

「それがどうしたんだ」

「どうかしたのじゃ。それを教えてやろう」

「恐れって何なんだ」

やはり彼はそれを全く知らなかった。

「それは一体」

「それを知らないで森の外に出ようというのが」

ミーメは呆れた声を出してみせた。

「全く。困った奴じゃ」

「困ったら何かあるのか」

「あるのじゃよ。いいか？」

「ああ、何だ？」

「これは御前のお母さんが言ったことじゃ話巧みにこう言ってみせた。」

「そしてわしは約束したのじゃよ」

「母さんにか」

「そうじゃ。御前が恐れを知るまでは森から出してはならんとな」

「そんな約束をしていたのか」

「そうじゃ。真つ暗な森の中や黄昏の暗い中で遠くで何かざわめき妙な音や呻き声がして」

その森の中のことである。

「何かがちらちらと光り自分の周りを飛んでそうしたことが次第に近付いて来ると」

「全部何かわかつているさ」

ジークフリートは既にそれはミーメから教えられていたし知っていたのである。

「そしてどうにでもできるから怖くはない」

「ぞつとしたり身の毛のよだつものはなかったのか」

「そうしたことはないな」

それがジークフリートだった。

「全くね」

「では激しい旋律や心が乱れたり気が重くなったりはじゃないね」

それもないと答えるのだった。

「全く」

「胸の中が震えたり心臓が激しく鼓動することとか」

「随分変わったものなのは間違いないんだな」

ジークフリートにわかるのはこのことだけだった。

「そういったものか」

「では全く知らないのか」

「全くね」

知らないとはつきり答えるのであった。

「しかしそれをどうやって僕に教えてくれるんだ？」

「それはじゃな」

「御前みたいなのが僕にそれを教えられるのか？」

「それはじゃな」

「教えられるんだな」

ミーメを睨み据えての言葉だった。

「僕にその恐れを」

「そうじゃ。教えられる」

彼は言い切った。

「間違いなくじゃ」

「ではどうやってなんだ」

「ついて来るのじゃ」

こう告げるのだった。

「わしにな」

「ついて来るだと？」

「そうじゃ」

ジークフリートを見ながらの言葉だった。

「その通りじゃ。ついて来るのじゃ」

「何処にだい、それで」

「この森の奥に一匹の竜がいる」

「そういえば御前は前にちらりと saying していたな」

「かなり奥じゃ」

こう断ってさらに言つのであった。

## 第一幕その十五

「そこにその竜がおるのじゃ」

「そこにだな」

「欲望の洞穴と呼ばれていてじゃ」

「このことはジークフリートにはじめて教えることであつた。」

「森の遙か東の奥の外れにあるのじゃ」

「そこか」

「そこから世界はすぐ近くじゃ」

「このこともジークフリートに告げた。」

「世界に出られるぞ」

「ではすぐにそこに連れて行け」

「有無を言わせない口調だつた。」

「いいな、すぐにだ」

「ああ、わかつた」

「その為には剣だ」

「ジークフリートの方から言つてきたのだつた。」

「剣を早く作るんだ」

「剣をか」

「そうだ、すぐに作るんだ」

「また彼に告げたのだつた。」

「その剣をだ。早くだ」

「だがわしにはできん」

「何故か今は涼しい顔で告げるのだつた。」

「それはじゃ。できん」

「できないというのか」

「あの剣だけはじゃ」

「忌々しげに出してきた言葉だつた。」

「それは無理なのじゃよ」

「怠ける為の嘘なのか」

「嘘ではない、それはこれまで言った通りじゃ」

「そうか、それなら」

それを聞いたジークフリートはすぐにこう言ってきた。

「その剣の欠片を寄越すんだ」

「何っ!？」

「聞こえなかつたか!? 寄越すんだ」

有無を言わせぬ口調で彼に言う。

「その剣を僕にだ。寄越すんだ」

「一体何を考えているんじや」

「こうなったら僕が作る」

「何っ!？」

「聞こえなかつたか、僕が作るんだ」

彼は言うのであつた。

「この僕がだ」

「何を言っているんじや御前は」

「弟子が親方の言葉を聞いているだけじゃ」

ジークフリートは戸惑うアルベリヒにさらに言ってきた。

「親方のできないことをできるようになるものか」

「だからだというのか」

「そうだ、僕がやる」

言いながらもその剣を取ってしまっていた。

「早速はじめるからな」

「馬鹿な、そんなことが」

「いや、できる」

やはり有無を言わせない。

「僕はできるんだ」

「何故そう言えるのじや」

「わかるからだ」

こう言いながら早速火を起こした。そして周りにある機械もだ。



「機械の動かし方を何時」

「御前のやっつてることを見てわかったんだ」

ジークフリートは答えた。

「全部な」

「何ということじゃ」

「よし、はじめるぞ」

「待て、その機械は使わんのか」

「ああ、いい」

ミーメにとって最も大事なものは無視したのであった。

「こんなもはいい」

「しかもそんなにすり減らすのか」

「そうだ」

今度は剣をかなり削っていた。

「こつするんだ、折れたものには」

「何という馬鹿なことを」

ミーメにとっては想像を絶するジークフリートの剣の使い方であった。

「これが剣の作り方が」

「さあ、やるぞ」

「熱くはないのか？」

「何がだ」

周りが激しく燃え盛っていてもジークフリートは平気であった。

「何が熱いんだ」

「そう言えるのじゃな」

「全く熱くはない」

今の彼にとってはそうなのだった。

## 第一幕その十六

「全くな」

「うづむ。しかしじゃ」

「この辺りは鍛冶屋であり科学者でもあるから見てわかった。

「これは上手くいきそうじゃな。そして」

「彼はあることに気付いた。

「剣を鍛え上げてそれで竜を倒すか」

「その未来に気付いたのだ。

「このままではじゃ。すると」

「そしてまた別のことにも気付いたのだった。

「わしの首はどうなるのじゃ」

「このことであつた。

「それではわしの首は。どうなるのじゃ」

「言いながら焦りはじめていた。

「このままではこいつの気紛れのままです。大変なことになったぞ」

「おいミーメ」

「ここでジークフリートが激しく動き回りながらミーメに問うてきた。

「聞きたいことがある」

「何じゃ？」

「何て名前なんだ？」

「こつ聞いてきたのである。

「この剣の名前は」

「それが」

「そつだ。何という名前なんだ？」

「また彼に問うのであつた。

「この剣の名前は」

「ノートウングじゃ」

「ノートウングというんだな」  
「そうじゃ」

まさにそうだと教えるミーメだった。

「前にも言ったと思うがのう」

「そういえばそうだったか」

ジークフリートも言われてそうかもと思った。

「とにかくだ。これは僕が鍛える」

「どうしてもそうするのじゃな」

「止めても無駄だ。いいか」

早速剣を鍛えながら叫びはじめた。

「ノートウング！ノートウング！宿望の剣！」

「御前の剣だというのじゃな」

「そうだ。何故御前は折れたんだ」

そのノートウングに対して問い掛ける。

「その鋭い剣をまず粉々にし溶かし」

さらに叫ぶ。

「ホーホー！ホーホー！ホーハイ！」

「何を叫んでいるのじゃ」

「炎よ吹け！無限の炎で剣を溶かしそしてそこからまた剣を生まれ

させるのだ」

言いながら剣を作り上げていく。ミーメはそれを見ているだけではなかった。

「あいつは作り上げるのう」

それをもう読んでいたミーメだった。

「そしてファフナーを倒すじゃろうな」

「ホーホー！ホーハイ！」

ジークフリートの叫びは続く。

「そして宝も指輪も手に入れる。それをわしのものにするにはじゃ」

「さあ、出て来いノートウング！」

「そしてそれと一緒にわしの首を保つにはじゃ」

どうしようかと考えているのだった。

「竜と闘い疲れた時に」

「さあもうすぐだ」

彼は剣を作り続けている。

「ノートウング、火の流れが氷の中に流れ込んで」

「飲み物を出してやればいいな」

ミーメは考え続ける。

「毒を入れてそれでじゃ。よし、それでいい」

「ノートウング、ノートウング！」

ジークフリートはミーメの邪な考えには気付かない。

「炎と氷の中で生まれる！その中から！」

「さて、それではじゃ」

ミーメはこれで考えを確かなものにした。

「あ奴は剣を作りわしは毒を作る。そうしよう」

「ノートウング、今こそ！」

「兄貴の作ったあのこの世を支配する黄金の指輪がわしのものになる」

彼は今はその指輪のことを考えていた。

「あいつもこき使ってやろう。あらゆるものがわしのものになるのじゃな」

「さあ、僕の手に戻るんだ！」

「神々も巨人も人間もわしにかしづく。いよいよわしの時代じゃな」

最早自分の手の中にあると思っっている。ジークフリートはそんな彼なぞ意に介さず剣を作り続けている。少なくとも何かが起ころうとはしていた。

## 第二幕その一

### 第二幕 倒れる竜

「御前か」

「何っ、貴様か」

アルベリヒは森の中にいた。そこでさすらい人と会ったのである。

「何故ここにいる」

「それはこちらの台詞だ」

さすらい人は彼を見据えながら応えた。

「何故ここにいる」

「知れたことだ」

アルベリヒもまた彼を睨んでいた。

「わしのものを取り返す為だ」

「御前のものだというのが」

「そうだ」

忌々しげに彼に言葉を返す。

「その為にここに来て何が悪い」

「まるで巨人の門番だな」

さすらい人はその彼を侮蔑して述べた。

「まさにな」

「わしが門番なら貴様は何だ」

アルベリヒの怒りはさらに高まる。

「何だというのだ」

「私は見る為に来たのだ」

さすらい人自身が言うにはそうなのだった。

「何かをする為ではない」

「貴様の言うことなぞ信じるものか」

「何故そう言えるのだ？」

「あの時わしを騙したのは誰だ」

彼を指差しての言葉である。

「忘れたとは言わせん」

「あれは当然のことだ」

しかし彼は言うのであった。

「貴様の邪な野心を止める為にだ」

「必要だったというのか」

「そうだ」

こう言ってそれを正当化する。

「その通りだ」

「悪辣な策略家よ」

さすらい人を評しての言葉である。

「昔御前に縛り上げられた時の様にわしが馬鹿であったならば」

「どうだというのだ？」

「貴様が指輪を手に入れるだろう」

「そう思っているのだな」

「だが今は違う」

はつきりと言い返したのだった。

「今のわしは違うぞ。もう貴様のことは知っている」

「では騙されないというのだな」

「何があってもだ」

それはないというのだ。

「貴様の弱みも知っている」

「おう」

「わしの室で御前は借りを返した」

ここでも話は過去の事柄になっていた。

「御前にヴァルハラを築いてやったあの巨人達の労力に対してな」

「それも今はだ」

「あの傲慢な連中と貴様が契約したことはだ」

その時のことの話が続く。

「支配の源である貴様の槍の柄に今も文字として残っている」

「この槍にだ」

それは他ならぬ彼が最も知っていることだった。

「その通りだ」

「貴様があいつ等に支払ったものは再び巨人達から奪うことはだ」

アルベリヒは彼を指差して言い続ける。

「許されてはいない。貴様が自分でその槍の柄を否定することになるのだぞ」

「それはその通りだ」

「ではわかっているな」

彼はさらに言う。

「貴様の手の中に取りながらその槍は靱殻の如く砕け散るのだ」

「この槍の文字はだ」

さすらい人はその槍の文字を見ながら述べてきた。

「貴様の如き悪党と結託する為にあるのではない」

「では何だというのだ」

「貴様を屈服させる為にあるのだ」

そしてその槍で彼を指し示した。

## 第二幕その二

「戦いの為にある槍なのだ」

「そんなことを言っているがだ」

何とか不敵な笑みを作つての言葉だった。

「心の中では不安なのだな」

「私が不安に思っているだと？」

「そうだ。宝を守っている奴がわしの呪いで死んだのならだ」

アルベリヒが指輪にかけたその呪いによつてだ。

「誰が指輪を受け継ぐのか」

「誰だというのだ？」

「それは再びニーベルングのものになるのか」

つまり自分のものに帰るといふのである。

「貴様は永遠にそれを恐れ続けるのだ」

「私が恐れているというのか」

「そうだ。わしが再び指輪を手に入れたならば」

その時のことを話すのだった。

「愚かな巨人達とは違つ」

「同じだがな」

ここでさすらい人はこんなことを言うのだった。

「大男総身に知恵が回りかねだな」

「あいつ等はそうだ」

「御前にこの言葉を教えてやろう」

「何だというのだ？」

「小男の総身に知恵も知れたものだ」

告げたのはこの言葉だった。

「そのことを言っておく」

「少なくともわしは違つ」

アルベリヒは己を愚かだとは思っていないのだった。



「指輪の力を存分に引き出しだ」

「そして世界を治めるのだな」

「そうだ」

まさにその通りだというのである。

「聖なる守護者の勇士達も震え上がるだろう」

「エインヘリヤル達もか」

「わしはニーベルングの軍勢を引き連れヴァルハラに進む  
戦争を挑むというのだ。」

「そして世界はわしが支配するのだ」

「貴様の考えはわかつている」

さすらい人はそのことはもう読んでいたのだった。

「既にな」

「わかっているというのか」

「そうだ」

まさにその通りだというのである。

「しかしそんなことは気にはかけてはいない」

「そう言うのだな」

「指輪を手に入れた者が指輪を支配するのだ」

「わしにははつきりと分かっていることを何故ぼかすのか」

アルベリヒはこう彼に返してみせた。

「貴様がそれだけ強情なのはだ」

「強情である気はない」

「貴様の血を受けた息子達を頼りにしているからだな」

「だとしたらどうなのだ？」

「貴様は自分でそれを取ることはできん」

見透かしているということを見せられている。

「その為に一人の英雄を用意しているな」

「争いたいならばだ」

だがさすらい人はまだ彼に告げるのであった。

「その相手は私ではない」

「何っ!？」

「ミーメだ」

「あいつだというのか」

「そうだ、あの男だ」

ここで彼の名前を出すのである。

「貴様の弟こそが御前を脅かす男だ」

「あの臆病者がか」

「ファフナーを倒す為に」

ここで自身の後ろを見た。そこには巨大な黒い洞穴の入り口がある。

「今奴は一人の英雄を連れて来る」

「人間の英雄をだな」

「神の血を引くな」

「つまり貴様のだな」

やはり全てをわかっているアルベリヒだった。

「そうだな」

「その若者は私のことを知らない」

さすらい人はまた言った。

「ニーベルングが自分の為に利用しているのだ」

「あいつの為にか」

「だから貴様に言っておく」

さすらい人の言葉は続く。

### 第二幕その三

「用心するのだな」

「それでは貴様はだ」

アルベリヒは敵の言葉を聞き終えてからまた述べた。

「指輪から手を引くのか」

「私は愛する者にそれを任せる」

それが彼の考えであった。

「生きていようが倒れようがその自由だ」

「ふん、どうだかな」

「英雄だけがわしの役に立つのだ」

彼は言い切った。

「それこそがだ」

「わしが指輪を奪い合うのはだ」

アルベリヒの言葉は剣呑なものになってきていた。

「ミーメだけなのか」

「今のところはな」

さすらい人はさらに彼に忠告してきた。

「奴だけだ」

「それなのにわしが手に入れられないというのか」

「その英雄が手に入れるのだ」

やはり彼ではないというのである。

「二人のニーベルングが指輪を欲し」

「ふん」

「指輪を見張るファフナーは倒れる」

「あの竜が倒れ」

「そして英雄のものとなるのだ」

そうなると今話す。

「それ以上も知りたいか？」

「まだ言うことがあるのか」

「あの場所にいる竜だ」

また後ろを見ての言葉である。その洞穴を。

「貴様が奴に命が危ないと伝えればだ」

「どうだというのだ？それで」

「喜んでその下らないものをやるかも知れんぞ」

彼をからかっているのは明らかであった。

「それでな。それではだ」

「今度は何をするつもりだ」

「貴様の為にあの竜を起こしてやろう」

そうするというのである。

「ファフナー！」

「呼ぶのか」

「起きるのだ竜よ」

「誰だ」

するとだった。地の底から響き渡る様な恐ろしい声が聞こえてきた。

「わしを呼ぶのは誰だ」

「貴様の危機を知らせに来た者がいる」

「危機だと？」

「そうだ、貴様を守っているその宝をだ」

こう彼に告げるのであった。

「命の代わりに差し出せば死から救うとな」

「何が欲しいというのだ？」

竜は洞穴から彼の言葉に問うてきた。

「それで何をだ」

「わしだ」

アルベリヒがここで彼に告げた。

「このわしだ」

「貴様だというのか」

「そうだ、いいか竜よ」

アルベリヒはさらに彼に告げるのだった。

「英雄が来る、貴様を倒そうとな」

「ではその英雄を喰らおう」

ファフナーはこう答えた。

「出て来たその時にな」

「その英雄は大胆不敵だ」

またさすらい人が彼に告げた。

「剣は鋭いぞ」

「そいつは指輪だけが欲しいのだ」

アルベリヒも言う。

「その指輪をわしにくれるのならばだ」

「指輪をだ」と

「そうだ」

まさにそれだと答える。

「そうすれば貴様の代わりに戦ってやるぞ。そして貴様は」

「どうなるというのだ？」

「他の財宝を守って静かに長く生きることができなのだ」

「こう彼に告げる。」

## 第二幕その四

「これからも長くな」

「受けるつもりはない」

「こう返す竜だった。」

「そんなことはな」

「受けぬというのか」

「わしはここにいる」

彼はアルベリヒに対して答えた。

「横になってわしのものを守る。このままな」

「失敗したな」

さすらい人はすぐに彼に告げてきた。

「どうやらな」

「ふん、何ということだ」

「私は善意のアドバイスをした」

ここでこのことを言ってみせるのだった。

「それは言っておこう」

「それでどうだというのだ？」

「最早貴様に悪党と言われる謂れはない」

彼は告げた。

「それは言っておくぞ」

「聞くつもりはない」

「だが確かに忠告はした」

彼はこのことを強調する。

「それはな」

「ではどうだというのだ」

「最後にまた言っておこう」

そしてさらに言ってきた。

「よく覚えておくことだ」

「何を言うつつもりだ？」

「全てはなるようになるものだ」

「このことを告げるというのである。」

「全てはな」

「貴様が言う言葉ではないな」

アルベリヒはまたしても忌々しげな顔になっていた。

「それはな」

「そう思うのなら思えばいい」

またそれには構うところはないというのであった。

「だが告げた」

「まだ言うのか」

「御前は何も変えることはできないのだ」

そうした意味で自分と同じだというのだ。

「自分ではな」

「その言葉忘れるな」

アルベリヒの声の剣呑さは増していく。

「絶対にな」

「無論貴様が何を言いたいのかもわかっている」

さすらい人の言葉に微かに陰が指した。

「その子を作れなくなった貴様がな」

「わしの髭は全て落ちてしまった」

見ればその通りだった。かつてはあったその髭は全くない。それが何故かというところこれこそが彼が愛を捨てたということの証なのである。

「だが子は作れたのだ」

「おかしな方法でだな」

「愛がなくともだ。そして髭がなくなろうともだ」

「ニーベルングの技術でだな」

「そうだ。作れるのだ」

「そうだというのである。」

「子もな。それは言っておく」

「確かに聞いた。だが」

「だが？」

「精々しつかりとやることだな」

「さすらい人は話を戻してきた。」

「それを忠告しておこう」

「その忠告をして去るつもりか」

「少なくともここは去る」

彼は言った。

「ミーメとやり合つのだな」

「あいつとか」

「そのやり方は貴様が最もよくわかっているな」

これについてはというのである。

「そうだな」

「あいつは昔から愚図だった」

兄弟でありながらお互いにいい感情はないのだった。

「あの臆病者ならば恐れることはない」

「では好きにするがいい」

こう言つて去るうとした。

「ではな」

「謀りを好み虚言を弄する神々の一族め」

その去るうとする彼を見送りながらの言葉だ。

「貴様等の滅亡を見届けてやる、何があるうともな」

こう言つてその場から一旦姿を消す。すると彼と入れ替わりにジークフリートとミーメが来たのであった。



## 第二幕その五

「さあ、ここじゃ」

「ここなのか」

「ここには来たことがあつたか？」

「そういえばなかったな」

言われてそのことに気付くジークフリートだった。

他の辺りは行ったことがあつたのに」

「ここは遠いからじゃ」

だからだというミーメだった。

「来ていないのも無理はない」

「そうか」

「それでじゃが」

「ミーメ」

ジークフリートから言ってきた。

「ここで若しもだ」

「若しも？」

「恐れだつたな」

このことを話に出してきた。

「それを学べなかつたらだ」

「どうだというのじゃ？」

「それでも森を出るぞ」

そうするといのである。

「それでいいな」

「ここで若しも」

ミーメも彼の言葉を受けて返してきた。

「御前が学べなければじゃ」

「恐れをだな」

「そうじゃ。もう他のところや他の時には学べないじゃらう」

ジークフリートをわかつたうえで言葉であった。

「決してな」

「そうなんだな」

「あの暗い洞穴じゃが」

今彼はその洞穴を見ていた。ジークフリートもそこを見ている。

「見えるな」

「はつきりとな」

「あそこには残忍で荒々しい竜がおるのじゃ」

「ずっと言っているそいつがだな」

「そうじゃ。凶暴でしかも大きい」

ミーメは竜についてさらに言う。

「そうそう勝てる奴ではない」

「そんなに強いのか」

「御前なら一呑みじゃな」

「それならだ」

そう言われても臆することのないジークフリートだった。

「その口を塞ぐだけだ」

「随分と簡単に言うのう」

「そうすれば食べられることはない」

恐れを知らないだけはある言葉だった。

「それだけじゃないか」

「口からは毒の涎が流れ出ておるのじゃぞ」

しかしミーメはさらに言うのだった。

「その涎を受けるとじゃ」

「どうなるっていうんだい？今度は」

「肉も骨も溶けてしまうのじゃ」

そうなるというのである。

「それで終わりじゃ」

「それならだ」

そう言われてもジークフリートは臆しない。

「涎がかからないようにかわせばいい」

「長い尾で打ちのめされるぞ」

「ミーメも負けずという調子で返す。」

「尻尾を巻きつけて締め上げられるとどんなものでも砕け散るのじやぞ」

「じゃあそれに用心しよう」

「ジークフリートはそれを言われても平気であった。」

「そしてだ」

「そして？」

「倒すだけだ」

一言だった。

「そいつには心臓があるんだな」

「残忍で堅い心臓がある」

「そうか。それで」

さらに聞く彼だった。

「場所は何処なんだ？」

「場所か」

「そうだ。心臓の場所は何処なんだ？」

それを問うのだった。

「人間や動物なら誰でも鼓動しているそこにあるのか？」

「そうじゃ」

そうだと答える。

「そこにあるのじゃよ」

「そうか、わかった」

それを聞いてまた言うのだった。

## 第二幕その六

「ならそこにノートウングを突き刺す」

「そうするというのが」

「そうだ。これが恐れなのか？」

また逆に彼に問うてきたのだった。

「こんなのがだ。何でもないじゃないか」

「怖くないというのが」

「怖い!？」

そう言われても平気な顔のままであった。

「怖いとは何なんだ？」

「だから恐れじゃ」

「何も感じないさ」

やはりそうなのだった。

「全くな」

「何という奴じゃ」

「やっぱり御前は駄目じゃないか」

こう言ってまたミーメを否定する。

「所詮その程度なんだな」

「そこまで言うならばじゃ」

いい加減ミーメも頭に来ていた。

「実際に見てみるのじゃ」

「その竜をか」

「そうじゃ。見てみればわかることじゃ」

「なら見てやる」

ジークフリートはただ前を見ていた。

「その竜をな」

「見たことはなかったのう」

「ない」

「なら余計に見るのじゃ」  
「そして言うのだった。」  
「それこそじゃ」  
「それこそ？」  
「見ただけで気が遠くなるわい」  
「くすくすと笑つての言葉であつた。」  
「それだけでじゃ」  
「そこまで言うのか」  
「言つぞ。眞実じゃからな」  
「あくまでこう主張するのであつた。」  
「目の前が真つ暗になり足元がぐらついてじゃ」  
「それでどうなるつていうんだ？」  
「胸が締め付けられ鼓動が激しくなつてじゃ」  
「そしてさらに言葉を続けていく。」  
「御前にこのことを教えてやったわしにじゃ」  
「何だというのだ？」  
「感謝して愛することになるぞ」  
「僕が御前を愛する！？」  
「ジークフリートにとってはこれは全く心外な言葉だつた。」  
「馬鹿を言え」  
「馬鹿にだと!？」  
「そうだ。そんな筈があるものか」  
「こう言うのだった。」  
「戯言を言うな」  
「戯言ではないぞ」  
「もう御前に話すことはない」  
「いい加減彼も頭にきたのである。」  
「さつさと何処かに行け」  
「またそんなことを言うのか」  
「何度でも言つてやる。とにかくだ」

今にもノートウングを抜こうとする。それを見たミーメも流石に去る。

「やれやれ、わかったわ」

「さっさと何処かに行け」

「ではそろそろ出て来るからじゃ」

ミーメはこそこそと去りながらジークフリートに告げる。

「用心するのじゃぞ」

「用心なぞ必要ない」

「泉に水を飲みに出て来るからな」

「竜の動きも教えておくのだった。」

「ではな」

「おいミーメ」

その去ろうとするミーメにまた来たジークフリートだった。

「御前が泉のところに行くならな」

「何だというのじゃ？」

「竜をそこに追い立てるぞ」

半分本気の言葉だった。

「いいな」

「何ということをするのじゃ」

「そいつが御前を飲み込んでしまったらそれから竜を倒してやる」

「こつ言うのである。」

## 第二幕その七

「それでいいな」

「また何ということを言うのじゃ」

「それが嫌なら泉の側で休むな。遠くで休め」

そしてさらに告げた。

「それで二度と僕の前に出て来るな」

「戦いの後で御前を元気付けてやるのは嫌なのか」

「元気付ける!？」

「そうじゃ。何かあつたらわしを呼んでくれ」

こう言うのである。

「わかつたな」

「そんなことがあるものか」

「まあその時は呼んでくれ」

あくまでこう言うのだった。

「いいな」

ここまで話して姿を消す。その時にこつそりと呟いた。

「共倒れになってくれればいいのじゃがな」

こうしてジークフリートは一人になった。ここでまた言うのであった。

「あいつが僕の親父でないとは何といいことだ」

そして今度は周りを見回す。

そこは森の中でもとりわけ緑が多い。その緑の中で呟く。

「この爽やかな森も今はいい。やっと楽しい一日も微笑みかけてくれる。それにしても」

ここでふと思った。

「僕の父親はどんな人だったんだろう」

それを思うのだった。

「ミーメに息子があつたらあいつそっくりになる」

まずはそれを考えた。

「灰色で醜くいやらしく小さく歪んでいて垂れ下がった耳を持っていて」

まさにミームそのものである。

「眼はただだれているんだろう。あんな醜いアルプはもういい」  
言葉は続く。

「そして僕のお母さんはどんな人なのか。それは考えられない」  
そう思いながら想像していく。

「牝鹿のそれよりも美しい瞳だったのだろうか。それに」  
想像は続く。

「不安の中で僕を生んで死んだのか。人間の母親は子供を生むと死ぬのか」

こつも思っただった。

「それは悲しいことだ。余計に僕のお母さんに会いたくなかった」  
ここで気付いたのは。森の小鳥だった。

「小鳥か。そういえば御前の声も聞いたな」

「さあ、どうなるかな」

「面白そうだね」

小鳥達はここで囁いているがジークフリートにはわからない。

「竜に勝てるかな」

「いけるんじゃないの?」

こつ言っていく。

「甘いさえずりがわかったらお母さんのことがわかるかな」

「あれ、何か言ってるね」

「そうだね。お母さんって?」

小鳥達にはジークフリートの言葉がわかった。

「そういえばあの人死んで随分経つけれど」

「あの子も大きくなつたね」

こつ言いながらであった。ジークフリートを見守る。ジークフリートはさらに言う。



「ミーメは小鳥のさえずりも聞こえるようになると言っていたが」  
「まあそれはね」

「特別な方法が必要だけれど」  
「また言い合う小鳥達だった。」

「できるかな」

「それがわかるかしら」

「真似をしてみようか」

「こんなことも考えた。」

「声の響きを。そうすればわかるかな」

「そしてまた言った。」

「言葉は駄目でも鳥の言葉を使ってみればお喋りもわかるかも知れない」

「おや、そう考えるんだ」

「面白いじゃない」

「実際にやってみるジークフリートだった。葦笛を吹いてみる。しかしであつた。」

「駄目か」

「上手くいかなかったのだった。」

「これでは駄目だ」

「まあそれじゃあね」

「難しいね」

「小鳥達に恥ずかしいな」

「こう言つて顔を俯けさせた。」

## 第二幕その八

「こんなことになって」

「気を落とした？」

「仕方ないのに」

「参ったな、どうすればいいんだ」

彼は俯きながら述べる。

「どうすれば聞かせてやれるんだ」

「僕達にその声を」

「そうということね」

「どうすればいいんだろう」

そして考えるのであった。

「小鳥達に対して。けれど」

今度はだった。角笛だった。腰のそれを取って高らかに吹くのだ  
った。

笛の音は遠くまで響く。それが返っても来る。それを聞いてジークフリートはまた呟いた。

「さて、何が出て来るかな。狼か熊、それとも」

「あつ、来たな」

「そうね」

するとであった。洞穴からそれが出て来たのである。

「出て来たな。楽しい仲間になつてくれるか」

「貴様は一体」

巨大な竜だった。黒く禍々しい姿をしている。眼は赤く四肢は太い。そして鋭い牙や爪からどす黒い毒汁が滴り落ちている。その竜が出て来たのである。

「喋れるのか」

「だとしたらどうする」

「それなら答えろ」

その竜に対しての問いだった。

「御前がこの森の竜だな」

「そうだ。我が名はファフナー」

こう名乗ったのである。

「巨人達の主でもある」

「そうか。御前がその巨人達の主か」

「そうだ」

まさにそれだというのである。

「わかったな」

「そしてだ」

その彼にさらに問うジークフリートだった。

「教えてもらいたいことがもう一つある」

「今度は何だ？」

「ここに一人恐れを知らない男がいる」

「それは誰だ？」

「御前の目の前にいる」

つまり自分だというのである。

「御前はその男に恐れを教えられるか」

「無鉄砲なのか勇氣なのか」

ファフナーはそれを聞いて言った。

「そんなことはどうでもいいが」

「何だ？」

「わしは水を飲みたいのだ」

己の事情の話であった。

「それを邪魔するのか」

「だとしたらどうするのだ？」

「食い物になるといふのか」

こうジークフリートに対して言ってきたのだった。

「なら容赦はしないぞ」

「その口で僕を飲み込むのか」

「どかぬならそうする」

その長い舌を出しての言葉だった。それ自体がまた蛇の様に蠢く。

「どうするのだ？それで」

「恐れを教えてもらう」

あくまでこう言うのだった。

「御前にそれができるか？」

「できる」

竜もまた言う。

「それはな」

「できるんだな。じゃあ教えてくれ」

「一口で飲み込んでやる」

そうするというのだ。

「それで教えてやる」

「残念だがそれは遠慮する」

言いながら不敵な笑みを浮かべてみせたのだった。

「それはな」

「嫌だというのか」

「考えるまでもないことだ」

「では去るのだな」

「それも考えるまでもない」

あくまで不敵だった。

## 第二幕その九

「だからだ。ここで御前を」

「わしをどうするといふのだ？」

「倒す」

そうすると告げて剣を抜いてみせた。その白銀の刀身が眩く輝く。

それを見た竜もだった。赤い目をさらに輝かせてきた。

そのうえで突進してきた。竜は若者を一口で飲み込もうとする。

しかしそれは適わなかった。

ジークフリートは一突きだった。その心臓の場所を見て突きを入れた。それで終わりであった。

胸を突かれた彼は瞬く間に巨人の姿に戻った。そのうえで言っただった。

「うう………」

「これで終わりだな」

ジークフリートはその彼に対して告げた。

「僕の勝ちだな」

「御前の心臓にはノートウングが刺さった」

こう告げるのだった。

「これで終わりだな」

「貴様は誰だ」

ファフナはジークフリートに対して問うてきた。今まさに息絶えんとしている。

「わしを倒したのは」

「僕はまだ多くのことを知っていない」

「こう彼に言っただった。」

「誰かもそれさえもだ」

「知らないといふのか」

「だがこの戦いは御前自身が僕を駆り立てた」

「そうか。知らないのか」

それを聞いて述べたファフナーだった。

「御前のしたことは御前が考えたことではないのか」

「それは」

「明るい目をした若者よ」

ジークフリートを見ての言葉だった。

「自分のことさえ知らぬ子よ」

「何だ？」

「御前が誰を倒したのか言っておこう」

「こつ彼に言うのだった。」

「御前がな。誰をだ」

「竜になった巨人ではないのか」

「今言つたなわしの名はファフナーだ」

仰向けになつて今まさに息絶えようとしている中での言葉だった。  
「かつて力の強い巨人族にファゾルトとファフナーという兄弟がいた」

「その兄弟がか」

「そうだ。神々から与えられた呪いの黄金を得る為に」

遙かな昔の話である。

「兄ファゾルトを殺し竜にその身を変えて宝を護つたのがだ」

「あんただな」

「そうだ。わしだ」

自分だというのだった。

「このファフナーだ」

「そうだったのか」

「そのわしも今御前に倒された」

「こつ言うのである。」

「巨人族はこれで指輪を手にするとはなくなった」

「指輪？」

「わし等は元々権力を望んではいなかった」  
自分達のことを言うのだった。  
「わしはそれに目を眩ませた。それが過ちだったのだ」  
「そうなのか？」  
「わからずともいい」  
ジークフリートに対してそれはいいとした。  
「しかしだ。わしを倒した御前にだ」  
「僕に？」  
「一つ忠告しておく。御前はおそらく」  
こう話していくのだった。  
「ミーメにそそのかされたな」  
「ミーメを知っているのか？」  
「知っている」  
知らない筈のないことだった。  
「あのずる賢いニールベングのことはな」  
「そうだったのか。あいつのことを」  
「あいつは自分のことしか考えない奴だ」  
もうその顔には死相が出ていた。  
「御前も愛しているわけじゃない」  
「僕もだ」  
「それとはまた違う。あいつはだ」  
さらに言っていくのだった。

## 第二幕その十

「御前を道具として育てていたのだ」

「道具？」

「いらなくなつた道具は捨てられる」

一つの現実だつた。

「御前は殺されようとしているのだ」

「僕がか」

「そうだ。気をつけるのだ」

彼への忠告だつた。

「わかつたな」

「ミーメが僕を」

「そして最後に聞きたい」

死にそんな顔で告げてきたのであつた。今まさに息絶えようとするその中で。

「御前の名前は何とこののだ」

「名前？」

「そうだ。御前の名前は何とこののだ」

「ジークフリート」

こつ名乗つたのだつた。

「それが僕の名前だ」

「ジークフリートか」

「そうだ。それが僕の名前だ」

「わかつた。ではな」

こつ言い残して事切れてしまつた。ファフナーはこれで死んでしまつたのだつた。

「死んだ奴は何も語らない」

ジークフリートはファフナーの亡骸を見下ろしながら呟いた。

「せめてだ。葬つてやろう」



その力でファフナーの亡骸を洞穴の中に運ぶ。そしてその中の深い部分に埋めて土をかける。そうして彼を葬ったのであった。

そのうえで剣に手をやる。するとであった。

「熱いつ、血か」

その血に触れて思わず手を退けた。咄嗟に指を口の中に入れた。するとだった。

「じゃあ僕はこれでね」

「ええ、じゃあ」

小鳥の一羽が去った。何とその声が今聞こえたのである。

「小鳥の声か」

「ニーベルングの財宝はジークフリートのものね」

こう言った声が聞こえたのである。

「洞穴の中にある隠れ兜もあるし」

「隠れ兜？」

「それに指輪を」

次に指輪のことと言う小鳥だった。

「手に入れば世界の支配者になれる」

「世界の支配者か。わかった」

それを聞いて頷くジークフリートだった。

「それなら」

彼には何もかもがわかった。そうしてまた洞穴に入るのだった。

そしてその頃。

「貴様か」

「むっ、兄貴か」

ミーメの前にアルベリヒが出て来た。そうして言い争いをはじめた。

「何でこんなところにいるんだ」

「御前こそだ」

アルベリヒは憎しみに満ちた顔で弟を見ていた。

「こんなに急いで抜け目なく」

「抜け目ないだど!?」  
「そうだ、何処に行くのだ悪党が」  
「悪党だと、それは兄貴の方だ」  
「わしが悪党だというのか」  
「そうだ」  
まさにそれだと言い返すミーメだった。  
「貴様が悪党でなくて何だ」  
「わしの宝を狙っているな」  
アルベリヒは既にそれを察しているのだった。  
「そうだな」  
「ここはわしの場所だ」  
ミーメもミーメで言い返す。  
「ここで何を探し回っている」  
「御前の泥棒を見過ごすものか」  
「わしが苦労して手に入れるものを邪魔するのか」  
「あの指輪は誰のものだ」  
アルベリヒも負けてはいない。  
「御前がラインから取ったものか？」  
「それを言うのか」  
「御前が指輪に魔力を仕込んだものか？」  
それを問うのだった。  
「どうなのだ？それは」  
「隠れ兜は誰が作った」  
しかしミーメはまた言い返した。

## 第二幕その十一

「あの姿を消す隠れ兜はだ」

「あれのことか」

「そうだ。御前が必要だから御前が作ったのか？」

「御前の様な能無しに鍛える術なぞあるのか」

言い争いは続く。

「わしの指輪の魔力のおかげで技術を知ったではないか」

「では御前は指輪をまだ持っているのか」

「ミーメが問うたのは指輪のことだった。」

「それはどうなのだ」

「指輪だと!？」

「貴様は愚かにもローゲに奪われたではないか」

また遙かな昔の話だった。

「御前の奪われたそれをわしが計略で手に入れるのだ」

「人間の若造がしたことを貴様は欲張って自分のものにするのか」

「それが悪いというのか」

「御前の仕事ではなくあの若造の仕事ではないか」

「育てたのはわしだ」

言うまでもなくジークフリートのことである。

「その恩返しをしてもらうのだ」

「恩返しだと!？」

「今まで散々骨を折ったんだからな」

そのジークフリートのことを言い続ける。

「それも当然のことだ」

「何と図々しい奴だ」

かといってジークフリートに同情しているわけではないアルベリヒだった。

「子供を育てたのを口実にして指輪を手に入れるのか」

「そうだ。何もかもをだ」  
「欲の深い奴だ」  
「全てはわしの手に入れるべきものだ」  
「ミーメはあくまで主張する。」  
「何としてもだ」  
「わしも釘一本もやらんぞ」  
「二人は同じであった。」  
「何があってもな」  
「ならばジークフリートを貴様にけしかけるぞ」  
「ミーメは切り札を出した。」  
「そうすればあの竜と同じくだ」  
「ファフナーか」  
「そうだ。貴様を倒させるぞ」  
「ムキになって言い返す。」  
「それでいいか」  
「その若者だが」  
「アルベリヒもムキになっていた。」  
「もうすぐ出て来るぞ」  
「何っ!?!」  
「隠れ兜も財宝も持っているぞ」  
「指輪もだな」  
「何ということだ」  
「アルベリヒにとつては最悪の事態であった。」  
「指輪までか」  
「ではわしがそれを手に入れるとしよう」  
「まだそんなことを言うのか」  
「悪いか」  
「許さんぞ!」  
「弟をそのまま殴り飛ばそうとする。」  
「ここで殺してやる。いいのか」

「殺せるものならそうしてみろ！」

また言い返すミームだった。

「その時は貴様も一緒に殺してやる！」

「おのれ！」

「死ね！」

二人で言い合う。しかしアルベリヒはジークフリートが来たのを見て。

去ろうとする。そのうえで弟に実に忌々しげな声で告げた。

「いいか」

「何だ？」

「指輪はわしのものだ」

あくまでこう言うのだった。

「いいな」

「貴様のものだというのだ」

「そうだ。何があってもだ」

赤いその目は執着そのものだった。

「それを言うておく。いいな」

「勝手に言うておけ」

こう言い合った後で姿を消すアルベリヒだった。ジークフリートはその洞穴からゆっくりと出ながらそのうえで呟いているのだった。

「宝は手に入れた。けれど何に使うのか」

それは全く知らない彼だった。

## 第二幕その十二

「兜も指輪も」

「全てはジークフリートのものね」

「ここでまた小鳥の声が聞こえてきた。」

「また小鳥の声が？」

「指輪も兜も。ただ」

「ただ？」

「ミーメには注意しないと」

「ミーメに」

それを聞いてファフナーの今際の言葉を思い出さずにはいられなかった。

「やっぱりあいつは僕を」

「彼は不実な男」

これもファフナーの言葉と同じだった。

「彼の企みをジークフリートが見抜いてくれないけれど」

「そうか、それなら」

それを聞いてある程度意を決したジークフリートだった。

「若しそんな素振りを見せたら僕はあいつを」

「さて、それではじゃ」

ミーメはミーメで考えていた。

「ここは殊更上手くやってじゃ」

「おうい、ジークフリート」

恭しくを装ってジークフリートの前に出たのだった。

「恐れを学ぶことはできたか？」

「いいや」

「ここでは忌々しげに返したのだった。」

「全く」

「全くなのか」

「そうだ。結局な」  
そしてこうも彼に告げた。  
「何もわからなかった」  
「そうか。わからなかったか」  
「ああ、全くな」  
「しかし竜は倒したんだな」  
「その通りだ」  
それは事実だというのだった。  
「この手で倒した」  
「ならいいじゃないか」  
「残酷な奴だったけど死んでしまつて悲しい」  
「悲しい!？」  
「そうだ、悲しい」  
こう言うジークフリートだった。  
「あいつが死んで悲しい」  
「何でそんなことを言うんだ？」  
「もっと嫌なやつが生きているからだ」  
忌々しげにミーメを見てきての言葉である。  
「今僕の前でな」  
「またそんなことを言うのか」  
「あの竜を僕に倒させたそいつがまだ生きている」  
「ミーメを忌々しげに見てであつた。」  
「僕はそれが一番腹が立つ」  
「まあそう言うな」  
またこんなことを言うミーメであつた。  
「そんなことを言つてもだ」  
「そんなことを言つても？」  
「詮無いことだ。何故ならな」  
何故かだった。ここでこんなことを言つてしまったミーメだった。  
「御前を永遠の眠りにつかせてやるからな」

「何っ!？」

そしてジークフリートはそれを聞き逃さなかった。

「今何て言った!？」

「御前にやってもらいたいことはちゃんとやってくれた」

ミーメの迂闊な言葉は続く。

「あるいは獲物を頂くだけだ」

「獲物をだ」と

「そうさ。これは上手くいきそうだ」

ジークフリートを見ながら楽しく話していくのだった。

「御前は騙し易いからな」

「僕を殺そうというのか」

「そんなことを言ったかな」

とぼけるがまた言ってしまったミーメだった。

「いいか、ジークフリート」

「今度は何を言うんだ」

「御前も御前の種族も大嫌いだった」

言葉は続く。

「心のそこから憎んでいた」

「そうだったのか」

「愛情から育てたわけじゃない、ファフナーの宝の為にだ」

このことを白状してしまった。本人の前で。



## 第二幕その十三

「御前がそれをわしに気前よく渡してくれないと」

「どうするとうんだ？」

「わかつているな、御前の命を貰わないといけないんだ」  
本人に対してにこにここと笑って告げた言葉である。

「その時はな」

「そうか、それはいいことだ」

「いいことだと？」

「御前が僕を憎いというのは僕にとっても嬉しいことだ」  
このことを言い返すジークフリートだった。

「しかし僕を殺そうとうのか」

「そんなことは言わなかっただろう？」

最早自分で自分がわからなくなっているミーメだった。

「御前は誤解している」

「誤解か」

「そうだ。一仕事やって疲れているんだ」

自分の言葉にここでも気付いていない。

「さあ、身体が熱いだろう。これを飲むんだ」

「何だそれは」

「ヴァルハラへ行ける飲み物さ」

ヴァルハラのこととはジークフリートにも教えていた。

「これを飲んでさあ」

「死ぬというのか」

「御前が剣を鍛える間にグラグラと煮ておいたんだ」  
つまり毒ということである。

「さあ、これを飲めば」

「どうなるとうんだ？」

「宝も指輪も何もかもがわしのものだ」

「そうして僕が手に入れたものを盗むのか」  
ジークフリートの目はいよいよ怒ってきていた。  
「御前はそうして」  
「何故誤解ばかりするんだ」  
やはり自分の言葉がわかっていない。  
「いいか、ジークフリート」  
「ああ。何だ？」  
一応話は聞くのだった。  
「わしの密かな企みを何とか隠しているのにだ」  
「それはよくわかる」  
「わかるな。馬鹿な御前がいちいち逆に取るからだ」  
また言ってしまった。  
「困るんだ。よく聞け」  
「ああ、聞いている」  
「わしが何を言うかな」  
こう強調しての言葉である。  
「御前の飲み物は今までだってわしが作っていたな」  
「作ってくれと頼んだことはない」  
「それを飲んで元気付けさせてやった。だからな」  
「それじゃあそれはどうやって作ったんだ？」  
ジークフリートの今の言葉は誘導尋問だった。  
「その飲み物は」  
「だから安心して飲むんだ」  
「ミーメはこの問いに気付かなかった。」  
「そうすればすぐに御前は」  
「僕は？」  
「意識が夜の霧の中の様に朦朧としてくる」  
「最初はそうなるというのだ。」  
「そしてだ」  
「そして？」

「すっかり意識がなくなつてぐったりとしてしまつ」

「そして御前はどうなるんだ？」

「宝も指輪も手に入れる」

諸手を挙げての言葉であつた。

「それでな。しかし御前が起きていれば」

「僕が起きていれば？」

「そうはならない。だから御前が寝ているその間にだ」

「どうするとうんだ？」

「その剣でだ」

今度はジークフリートが持っているそのノートウングを指し示してみせた。

「御前を切るのだ」

「やはりそうするつもりだったのか」

「首をばっさりとな。それでわしは全てを手に入れるのだ」

「僕が寝ている間に殺すのか」

「だからそんなことは言っていない」

誤魔化しはする。

## 第二幕その十四

「全くな。ただ首を斬りたいだけだ」

「御前の考えはよくわかった」

「わかっただろう?」

「ああ、わかった」

「まあ安心しろ」

本人を前にしての言葉もいよいよ終わろうとしていた。ジークフリートが怒りに満ちた燃える目で自身を見ていることもそのノートウングを振りかざそうとしていることにも気付かない。

「そんなに憎いわけでもがなり立てられたり嫌な苦勞をさせられたとはいえだ」

「それはもう聞いた」

「復讐するわけじゃない。御前が宝を譲ってくれればだ」

「嫌だと言えば?」

「だからその時はだ」

彼は言うのであった。

「御前を殺さなければならんだ。何故なら」

「何故なら?」

「兄貴が狙っている。アルベリヒがな」

全て話してしまった。

「だからヴェルズングよ、狼の子よ」

「僕のことだな」

「そうさ、早くこれを飲んで死ね」

笑いながらその飲み物を彼に差し出す。

「二度と飲むことはできないから堪能しろよ」

「もうこれ以上喋るな」

遂に怒りを爆発させたジークフリートだった。

「いやらしいお喋りめ、これを味わえ!」

「うわっ！」

一撃であった。ミーメはその剣を受けて事切れた。見事に袈裟懸けに斬られ己の血の中に横たわった。それで全ては終わりであった。  
「馬鹿な奴だ」

アルベリヒは遠くからそれを見て嘲笑った。

「そんなことを言うからだ」

「これでいい」

斬ったジークフリートはまだ怒っていた。

「そのまま永遠に寝ている」

「これで邪魔者がまた一人消えた」

アルベリヒはこのことを喜んでいた。

「さて、後はだ」

「小鳥の声は何処だ？」

それを探しはじめたジークフリートだった。

「それを聞いて気を休めたい。僕には誰もいない」

「人間の世界に寄るか」

アルベリヒは森から去りながら呟く。もうジークフリートの話は聞いていない。

「あいつに会っておくか」

「小鳥は気持ちよさそうに歌う。親も兄弟もない僕に聴こえるようにして」

彼は今孤独を感じていた。

「たった一人の仲間があいつだった」

「そしてだ」

「あの醜い小人だった」

ミーメのことに他ならない。

「あいつしかいなかった」

「ミーメも死んだしな」

アルベリヒはそのことを純粹に喜んでいた。

「ニーベルングの軍勢の出陣も用意しておこう」

「あいつは僕を殺そうとした。だから殺した」  
彼にとってはそれだけであつた。

「しかし。それで僕には誰もいなくなつた」

「あいつが指輪を奪い」

アルベリヒの声は次第に遠くになつていく。

「そしてヴァルハラを陥落させれば全てが終わる」

「小鳥よ、何か言ってくれ。聞いているから」

アルベリヒは森から完全に去つた。そしてジークフリートはその  
声を聴いたのである。

「ジークフリートは竜も小人も倒したのね」

「この声だ」

ジークフリートにはすぐにわかつた。

「そうか、言ってくれるんだな」

「なら次は」

「次は」

「女の人ね」

小鳥はこう言うのだった。

「次は女の人ね」

「女の人!？」

ここでジークフリートはかつてミーメが自分に教えてくれたこと  
を思い出した。

「そういえばあいつは」

「女の人」

「僕は男でそれ以外にも女がいると言っていたな」

「高い岩の上に眠り」

小鳥の言葉は続く。

「激しい炎が周りを囲んでいる」

「炎が」

「火の神ローゲが彼女を護っている」

ここでこの名前を出す小鳥だった。

「ヴォータンにそこに置かれたローゲが護る中を越えて」  
「炎の中を越えて」  
「彼女を起こせば彼女は彼のもの」  
「僕のものになるのか」  
ジークフリートはその言葉の意味を理解した。  
「そうか、わかった」  
「彼女の名前は」  
小鳥の言葉は続く。  
「ブリュンヒルテ」  
「可愛い歌。甘い囁き」  
ジークフリートは小鳥の今の言葉に感謝していた。  
「僕の心を駆り立てる。もっと聴きたい」  
「私は悲しい時でも朗らかに愛の歌を歌う」  
「それが小鳥なのか」  
「哀しい時も歓喜を以って歌う。憧れを持つ者だけがわかる歌」  
「それが僕なんだ」  
憧れを持つ者が誰か、すぐにわかったのだった。  
「森を出てその岩の上に。僕は彼女を目覚めさせられるのか」  
「花嫁を得ることもブリュンヒルテを目覚めさせることも」  
小鳥は歌い続ける。  
「臆病者にはできない」  
「臆病者には」  
「恐れを知らない者だけができる」  
「僕はそれを知らない」  
あらためて自分のことを思った。  
「それなら」  
「後に行くだけだな」  
「そこでまた学ぶことができる」  
「そうだ、そこでなんだ」  
小鳥の言葉の意味が今もわかった。

「恐れをそのブリュンヒルテから学ぶんだ。ではそこに行く」

「さあ、そこに飛びに行こう」

明らかに彼を誘う言葉だった。

「ブリュンヒルテがいるその場に」

「よし、僕も行くぞ」

意を決した顔で言った彼だった。既に多くの財宝は袋に担ぎ指輪も兜も備えている。重い筈の宝も何でもない感じで持ってしまったている。

「そしてブリュンヒルテを」

「こう小鳥の飛ぶ方向に向かう。彼にとって運命の出会いが迫っていた。」



### 第三幕その一

#### 第三幕 恐れ

「エルダよ」

さすらい人は岩山の上で誰かを呼んでいた。

辺りは漆黒の幕に覆われていて何も見えない。その暗闇の中で彼は槍をかざしそのうえでその名を呼んでいたのである。

「ここに来るのだ。長い眠りからまどろむ御前を今起こそう」  
「うう言うのだ。」

「霧の洞穴から、夜の底から現れるのだ」  
言葉をさらに続ける。

「御前の住処の深みから高みに出るのだ。根源の世界の女よ」  
それが彼女だというのだ。

「全てを知る女よ。今ここに」  
「声がした」

するとだった。彼の前の岩山の上から頭が出て来た。

「力強い歌声が呼ぶ」  
「来たか」

「強い魔法の力が働く。私は知の眠りから目覚めた」

それは紛れも無くエルダだった。だがその顔にはもう美しさはない。やつれ髪も乱れている。顔の至るところに深い皺が刻まれている。あの深い美貌は何処にもなこあった。

「私を目覚めさせたのは」  
「私だ」

さすらい人は己の前に全身を出してきた彼女に告げた。

「私なのだ」  
「貴方が」

「そうだ。私の歌はあらゆる者を起こす」  
「こう彼女に告げるのだった。」

「様々な知識を得る為にだ」

「その為に」

「そう、そして」

エルダを見ての言葉であった。

「この世を彷徨い探したが御前より賢い者はいなかった」

「私よりも」

「深みが隠すものよりも」

彼はエルダに告げる。

「山や谷、地上や水の中のこととも全て知っている」

「ただそれだけ」

「あらゆる生きる者に御前の息が通っていて」

このことも言うのだった。

「誰かが考えていることにも御前はいつも通じている。その御前に  
だ」

「私に」

「教えてもらう為に今日覚めさせたのだ」

「私の眠りは夢見ること」

こつ返すエルダだった。

「私の夢は考えること」

「そうだったな」

「私が考えることは知を支配すること」

エルダの言葉は続く。

「しかし私が起きている時に」

「その時に？」

「私のあの三人の娘達は起きていて」

「ノルン達か」

「そう」

エルダはここでその己の三人の娘達の名を呼んだ。

「ウルズ」

まずは彼女だった。

「ヴェルザンティ」

そして彼女を。

「スクルズ」

最後に彼女を。その娘達の名を呼んだのだ。

「あの娘達は起きている」

「それはわかつている」

「なら何故彼女に問わないのか」

エルダはこう彼に問い返した。

「運命の糸を紡いでいる彼女達に対して」

「ノルン達は世界の圧迫に従っている」

「世界の」

「そう、この世界のだ」

さすらい人は答えた。

「この世界の圧迫に従いそれを紡いでいる」

「運命の糸を」

「運命に対することはできない」

「それはできないと」

「回る運命の車を止める為に」

彼はエルダを見ながら言った。

### 第三幕その二

「御前の知恵が必要なのだ」

「男達の上は私に知恵をばやけさせる」

「どういふことだ？」

「私はかつて貴方に奪われた」

「ワルキューレ達をもつけたその時のことである。」

「あの娘達がいるのにまだ私に用があるといふのか」

「ワルキューレ達か」

「ここで彼はある女のことを思い出さずにはいられなかった。」

「そしてブリュンヒルデか」

「あの娘は」

「嵐を支配する私がだ」

「ここで突如一陣の突風が起こった。」

「自己を制するのに苦しんでいる時に私に逆らった」

「しかしそれは」

「言つな」

「そこから先は言わせようとしなかった。」

「己の心に従えなかつたその時は」

「そう。その時に」

「あの娘は小賢しくそれをした」

「しかしそれこそは」

「だが私はしなければならなかつたのだ」

「敵かな中にも苦渋の見られる言葉であつた。」

「戦いの神はその娘を罰し」

「戒律の為に」

「そして瞼を眠りで覆い」

「かつてのことであつた。」

「岩の上で眠らせたのだ」

「それが前のこと」  
「その聖なる乙女は」  
それがブリュンヒルテに他ならない。  
「女として男の愛を勝ち得た時に」  
「その時にこそ」  
「眠りから覚めるのだ」  
「そう。その娘は」  
「彼女に問うことが何の役に立つのか」  
「ローゲももういない」  
エルダの方からその名前を出した。  
「彼ももう」  
「ブリュンヒルテを護っている」  
さすらい人は彼についても答えた。  
「それによりだ」  
「そう。彼は人についた」  
「神であることを放棄してしまった」  
それがローゲなのである。  
「私の前から去ってだ」  
「彼は炎に戻ってしまった」  
「だからあの者も私に教えてはくれないのだ」  
語るその言葉がさらに苦々しいものになった。  
「もう何もだ」  
「しかし貴方はまだ」  
「そうだ。やらなければならぬ」  
「苦々しい、しかし強い言葉であった。」  
「それが私の今なのだ」  
「正義と誓いを護る者が」  
エルダはさすらい人を指し示して告げた。  
「それを破るのですね」  
「そうしてもだ」

「もう私の役目は終わった」  
遂にはこんなことを言うエルダだった。  
「それはもう」  
「終わったというのか」  
「そう」  
彼にも答える。  
「もうこれで」  
「行かせはしない」  
だが彼はそのエルダを止めようとした。  
「その魔力を私は使うことができる」  
「私をまだ止めると」  
「まだ何も聞いてはいない」  
だからだというのである。  
「御前は全てを知っている」  
「またそのことを言うのね」  
「それによりかつて」  
またしても過去の話である。

### 第三幕その三

「ヴォータンの大胆な心に不安の剣を突き刺した」

「遙かな昔のこと」

「そうさせたのが御前の賢い知恵だった」

「それだというのである。」

「その御前なら私に教えてくれることができるのだ」

「私なら」

「そうだ。神はどの様にして」

その言葉を出した。

「この不安を取り除けるのか」

「貴方は自分が思っているのとは違う」

「何？」

「それもわかっていない」

「わかっていないというのか」

「そう」

エルダの今の言葉には感情はなかった。だがそれでもその言葉はさすらい人にとってまさに無知と言うべき、そんな言葉になっていたのだった。

「その貴方がまだ問うというのか」

「その御前もだ」

ヴォータンも彼女に言い返した。

「わかっていないのだ」

「私が」

「自分がどんな女なのかをだ」

それをだというのだ。

「わかっていないのだ」

「私がわかっていない」

「如何にも」

言葉をさらに続けていく。

「私の意志の前には御前の知恵も飛び去るのだ」

「それこそが貴方だというのに」

「その御前の知恵も終わりなのか」

不意にこんなことも言う彼だった。

「最早」

「だとしたらどうするのか」

「もういい」

彼は言ってしまった。

「眠れ」

「もう永遠に」

「そうだ。眠ってしまうのだ」

彼はこうエルダに告げた。告げてしまった。

「そしてかつて激しい葛藤の中で絶望の中で決めてしまったことを」

「どうするというのが」

「喜び勇んで行おう」

そうするというのである。

「激しい嫌悪の中で世界をニーベルングに譲ろうとも覚悟したが」

「しかし今は」

「輝かしいヴェルズングに譲る」

その若者にとitudinalのだ。

「その何の邪気もない若者にだ。その者こそはだ」

「アルベリヒの呪いも意味がないと」

「そうだ、間違いない」

彼はそう信じ込んでいた。

「だからこそだ」

「そうならばいいのだが」

「きつとなる。そしてあの若者は」

言葉にいささか希望が宿っていた。諦観と共に。

「ブリュンヒルテを目覚ましこの世を救うのだ」



「ではわたしはもう」

「最早会うことはない」

彼女に再び告げた。

「さらばだエルダ、原始の母なる恐怖よ」

「そう、私はその中にあるもの」

「もう会うことはない」

その言葉には寂寥が確かにあった。しかしそれを押し殺し。

「沈むのだ、永遠の眠りへと」

「さようなら、嵐の神よ」

エルダは沈みながら最期に彼に告げた。

「もうこれで二度と」

こうしてエルダは消えた。するとそこに新たに人の気配がしてきた。

「来たか」

さすらい人は気配の方に顔を向けて告げた。

「ジークフリートが」

「ここか」

そのジークフリートが出て来た。

### 第三幕その四

「小鳥は行った。その小鳥に導かれて来たが」  
「若者よ」

さすらい人はその彼に声をかけた。

「何処に行くのか」

「んっ、あんたは」

「何処に行くのか」

「炎に囲まれた岩を探している」

こうその彼に答えるジークフリートだった。

「僕はその中にいる乙女を探し出して」

「何をするといいのだ？」

「彼女を目覚めさせようと思っている」

宝を足元に置いてからまた答えたのだった。

「そうしようと考えている」

「それは誰に言われてだ」

さらに彼に問うさすらい人だった。左手に持つ槍を動かしながら  
問う。

「誰に言われてそれを決めた」

「森の小鳥の声を聞いてだ」

ありのまま答える彼だった。

「それでだ」

「それでだというのか」

「小鳥が僕に知恵を授けてくれた」

彼は言う。

「それによってここに来たのだ」

「そう言うのだな」

「何がおかしい」

「小鳥は色々と話すが」

さすらい人が言った。

「それでも人には分からないものだ」

「僕にはわかることだ」

「それは何故だ？」

さすらい人の問いは続く。

「何故それがわかった。」

「欲望の洞穴で竜を倒した」

「竜をか」

「そうだ、僕は竜を倒した」

また答える彼だった。

「そいつの血を舐めたからだ」

「竜の血をか」

「燃える熱さがこの舌を濡らすや否や」

ジークフリートの言葉が続く。

「僕には小鳥の声がわかったのだ」

「貴様はその竜を倒したのか」

「ファフナーといった」

その名前も告げるジークフリートだった。

「その巨人は」

「巨人が竜にその身を変えていた」

さすらい人は知っていた。しかし知らないふりをして話を聞くのだった。

「それではだ」

「今度は何だ？」

「誰が貴様をそそのかした」

また問うさすらい人だった。

「その竜を倒せと告げたのだ」

「忌々しい小人のミーメがだ」

彼がだというのであった。

「僕に恐れを教え込もうとしたが」

「恐れをか」

「そうだ。それで倒した」

「このことも話したのである。」

「そのせいでだ」

「その腰にある剣でだな」

「それもわかるんだな」

「当然だ」

さすらい人はその槍で彼の腰にある剣を指差した。

「その剣だが」

「この剣がどうしたんだ？」

「それで竜を倒したのだな」

「またしても問うた。するとだった。」

「巨人フアフナーを」

「そうだ」

「その剣は誰が作った」

「誰がだつて？」

「今度はそれを答えるのだ」

「問いは続く。」

「剣は誰が作ったのだ」

「作ったのは誰かか」

「そうだ。誰なのだ」

「そしてこう問うたのである。」

### 第三幕その五

「そのミーメか」

「ミーメではない」

それは否定するのだった。

「あいつはこの剣を作れなかった」

「そうだったのか」

「それで自分で作った」

「御前がか」

「そうだ、僕がだ」

まさに彼がだというのだった。

「僕が作った。自分でだ」

「御前が造り上げたその剣の破片はだ」

「まだ問うのか」

「そうだ、誰が作った」

やはりここでも問うのだった。

「その剣のものは誰が作ったのだ」

「そんなことを知るものか」

流石にそこまでは答えられないジークフリートだった。

「僕が知っているのはただ一つだ」

「一つか」

「そうだ。破片では役に立たないところだ」

それだというのである。

「それで僕が作ったんだ」

「それはその通りだ」

ジークフリートの言葉に頷く彼だった。

「それはな」

「そうか」

「ふむ」

ここで、だった。さすらい人は彼を見て笑ってきたのだった。そうして言おうとするがジークフリートがまた言ってきたのだった。

「何故笑うんだ」

「笑う理由か」

「何故だ。何度も話を問うてきて」

実はそれが不満の彼だった。

「もういいだろう。道を教えてくれるか」

「道をか」

「そうだ。教えてくれるのかどうなんだ」

あらためて彼に問うのだった。

「そうじゃないなら黙っていてくれ」

「そう焦るな、若者よ」

こう言いながら彼に返す。

「老人は敬うものだぞ」

「それも悪くはないが」

「ならそうするのだ」

「僕は今まで一人だった」

ミーメのことは数には入れていなかった。

「邪魔な年寄りを知っているだけだ」

「それがミーメだというのだな」

「そうだ。そいつはもう倒した」

そうしたというのだ。

「次は御前になるのか」

「私だというのか」

「そうだ。若し御前が僕を頑固に引き留めるなら」

剣に手をかけての言葉である。

「あいつと同じことになるぞ。しかし」

「しかし？」

「御前の帽子は大きいな」

このことにふと気付いたのだ。

「何故なんだ、それは」

「風に逆らって歩く為だ」

だからだというのだった。

「それがさすらい人のやり方だ」

「そして御前は」

ジークフリートはまたあることに気付いたのだった。

「片目だな」

「片目か」

「そうだ、片目だな」

あらためてそのことを言うのだった。

「そいつはきつと御前に邪魔をされた奴がえぐり取ったのだな」

「それは違う」

「違うというのか」

「私はかつて片目を自ら捨てたのだ」

そうしたというのである。

「知識を得る為にだ」

「その為にか」

「そうだ。その為にだ」

さすらい人は言った。

### 第三幕その六

「私は片目を捨てたのだ」

「ではその残った目は僕がだ」

「どうするといふのだ」

「邪魔をするなら僕が奪ってやる」

実際にそうしかねない勢いだった。

「覚悟はできているな」

「御前は何も知らない」

しかし彼は言うのだった。

「何一つとしてだ」

「今度はそう言うのだ」

「そうだ、知らないから言えるのだ」

言いながらその片目でジークフリートを見ている。

「私は確かに片目しかない」

「それはわかっているのだな」

「しかし御前がだ」

「僕が？」

「そうだ。御前がだ」

また言う彼だった。

「御前がその片目なのだ」

「僕がといふのか」

「そうなのだ。御前がだ」

「馬鹿を言え」

ジークフリートは彼のその言葉をすぐに否定した。嘲笑する顔になっっている。

「そんなことがあるものか」

「御前は何も知らないのだ」

「知っただけでもそんな話信じるものか」



言いながら一歩前に出るのだった。

「御前の言葉なんかな」

「そう言うのだな」

「そうだ。そしてまた言うぞ」

言いながらいよいよ剣を持つとする。

「道を教えてくれ。いいな」

「道をか」

「そうだ。どうなのだ」

さらに彼に問う。

「教えられるのかどうだ」

「大胆な若芽よ」

ジークフリートをこう呼んだ。

「私が誰か知ったならそんなことは言わなかっただろう」

「御前をか」

「そうだ。そうした言い方はしなかっただろう」

また言うのだった。

「御前を信頼している私にはだ」

「僕を信頼している？」

「そうだ。その言葉は悲しいものだ」

彼はジークフリートを見ながら述べた。

「御前の心を愛している」

「僕の心をか」

「その私を悲しませないことだ」

こう話す彼だった。

「いいな」

「それで道をだ」

とにかくそれを聞こうとするジークフリートだった。

「教えてくれないのか。頑固な奴だ」

「頑固だというのか、私が」

「そうだ、眠れる女のいる場所をだ」

そこだというのである。

「知っているのか、どうだ」

「道はだ」

「可愛い小鳥はいなくなったが」

小鳥のこともここで話す。

「その女のことは教えてもらった」

「それを教えるつもりはない」

ここで言うジークフリートだった。

「何一つとしてだ」

「教えるつもりはないというのだな」

「そうだ。御前はそこに行ってはならない」

ジークフリートの前に立ちはだかるようにしてきた。

「決してな」

「何故止めようとするのだ」

「それはだ」

「それは？」

「岩を護る者を恐れるのだ」

「じつ言つのである。」

### 第三幕その七

「眠れる乙女は私の力で眠らされているのだ」

「御前の力でというのか」

「如何にも」

まさにそうだというのだった。

「彼女を起こす者は、そして」

「そして？」

「彼女を得る者はだ」

「どうだというんだ？」

「我が力を永遠に無力にするのだ」

そうするといふのである。

「彼女の周りに炎の海が流れているが」

「それはもう知っている」

「あれを見るのだ」

彼から見て左手をその槍で指し示した。そこは。

赤い光が見える。岩山の上にあつた。そこにあるのだった。

「あの光をだ」

「光だと？」

「そうだ、あれが見えるな」

その赤い光をまた指し示すのだった。

「あれをだ」

「あそこにその女がいるんだな」

「そうだ」

それはその通りだといふのだった。

「女はあの中にいる」

「奈良今からそこにいる」

「光はさらに輝き」

さすらい人は槍でその光を指し示し続けていた。

「灼熱もさらに激しくなっている。空を焦がす雲に」

「雲もか」

「揺らぐ炎が狂うが如く」

彼の言葉が続く。

「音を立てて燃え上がり」

「音も聞こえるのか」

「そうだ、聞こえるな」

「確かに」

言われると実際に聞こえてきた。

「それは聞こえる」

「それが貴様を焼き尽くすのだぞ」

言いながらだった。

「それでは。いいな」

「行くなというのか」

「まさか行くつもりか」

「そうだ、何があってもだ」

ジークフリートも引かない。あくまで行くというのである。

「どけ、僕は行く」

「貴様が炎を恐れないのならだ」

さすらい人は彼の前に立ちはだかる。

「私の槍が行く手を塞ぐぞ」

「闘うというのか」

「我が槍にはまだ支配の力がある」

「支配するというのか」

「そうだ、あるのだぞ」

左手のその槍で指し示しての言葉であった。

「御前の振るその剣はだ」

「この剣は？」

「この槍で砕けたのだ」

それを今告げたのだった。

「かつてはな」

「今は違う」

「いや、今もだ」

その言葉が強いものになっていた。

「この槍で再び、そして永遠に砕けることになる」

「砕けるというのか」

「父の仇だったのか」

いよいよその言葉を聞いて目が鋭くなる彼だった。

「御前は」

「だとしたらどうする」

「仇を取る」

言いながら遂に剣を抜いたのだった。

「いいな、これでだ」

「ならばだ」

さすらい人もまたその槍を構えた。そうして突きたてる。しかし  
だった。

### 第三幕その八

ジークフリートの剣が一閃された。それで終わりだった。

槍は柄のところまで真つ二つになった。さすらい人はそれを手に力なくしゃがみ込んだ。

そうしてだった。彼は頂垂れた声で言った。

「行くがいい」

「最初からこうすればよかつたんだ」

「最早私に引き止めることはできない」

彼は空しく去った。まるで風が消える様に。そして後に残ったジークフリートは。

「炎を浴びに行く。炎の中に花嫁を見つけるんだ」

こう言つてその炎に向かう。険しい岩山を何なく登りそうしてであつた。

「日の光の明るい荒野だ」

彼はそれを気に入っているのだった。

「果たして誰がいるのか」

そのことも考える。

「どんな女なのか」

炎は何なく通り過ぎた。しかし彼はここで気付いていなかった。

その炎は実はジークフリートを見て自然に避けたことを。そして炎が彼を見ていたことを。

「来たか」

それはローゲの声だった。

「遂に彼が来たな」

こう言つて笑つていた。

「人間の時代を切り開く若者が」

温かい声だった。その声で見ているのだった。

「彼女を目覚めさせるのか。なら私はもう」

「あれは」  
ジークフリートはここで横たわっている者を見た。  
「男か？」  
「ふむ、まだわかっていないな」  
ローゲはそんなジークフリートを見てまた言った。  
「女というものが」  
「まず兜を取るか」  
「言いながらその兜を取る。するとそこから出て来たのは。」  
「！？これは」  
「わかったな、これで」  
「何と美しい姿だ」  
「美女なのだ。それに気付いたのだ。」  
「これが女か」  
「そう、女だ」  
「輝く雲がうねりつつ明るい空を縁取っている」  
その美女を見ながら驚いていた。  
「胸が膨らんでいる」  
「今度は女の胸を見たのだった。」  
「何という豊かな夢なんだ」  
「夢ではない」  
「どうしたらいいんだ」  
彼は躊躇した。  
「僕はこの人に対して何をしたらいいんだ」  
「そうか。ここでか」  
「怖い……」  
「今始めてこの言葉を自分から言った。」  
「何をしたらいいのかわからない。鎧を断ち切るべきか」  
「さて、恐れを知ったか」  
ローゲはわかっていた。しかし彼に気付く者は今はいなかった。  
「これでよし」

「瞼が開かないのか。若し開いたら」

その閉じられた目を見ての言葉である。

「僕はその光に耐えられるのか。辺りが浮かび揺れ動き」  
言葉だけが出て来る。

「回っているかの様だ。切ない憧れに気が遠くなる」

「それが恐れだ」

「心が震える」

彼だけではどうしようもなくなっていた。

「これが恐れなのか」

そして言うのだった。

「この乙女を見て恐れる。恐れをなくすするには」

「さて、それはどうする？」

「勇気を出すにはどうするのか」

震えながらも何とか前に出ようとす。

「どうすればいいんだ」

「面白いものだ。竜で恐れを知らなかった若者が」

ローゲはそんな彼を見守り続けていた。

「これで知るのだからな」

「唇が美しい」

恐れの中で見ながら唇に気付いた。

「この花咲く口元を見ればどうするか」

また言う彼だった。

「甘い吐息のかぐわしさ。そうだ」

自然とそうしたのだった。

「この唇と僕の唇を合わせよう。そうしてみよう」

「よし、動いたな」

ローゲの言葉は微笑んでいた。

「いよいよだ」

ジークフリートはここで接吻した。その唇を重ね合わせる。すると  
とだった。



彼女がゆっくりと目を開きだした。ローゲはここで姿を消した。炎はジークフリートに気付かれないように姿を消したのであった。

「さて、あとは最後の仕事だ」

こう言っただけ姿を消すのだった。

「ブリュンヒルテ、その時を待っているぞ」

「私は」

そのブリュンヒルテが目を開いたのだった。

「目覚めたのね」

「目覚めたのか、今」

「私を起こしたのは誰なの？」

「こう言うのだった。」

### 第三幕その九

「その英雄は誰なのかしら」

「それは私だ」

ジークフリートの言葉は自然と変わっていた。

「私が炎を越えてやって来たのだ」

「あのローゲの炎を」

「それが私だ」

そして名乗るのだった。

「ジークフリートだ」

「ジークフリート」

「そう、それが私だ」

彼はまた名乗った。

「神々に祝福を」

「神々に？」

「そう、世界に祝福を」

上体を起こしながら言葉を続ける。

「光り輝く大地にも祝福を」

「祝福を」

「そう、私の眠りも終わりです」

ジークフリートに顔を向けていた。

「そして私を起こしてくれたのが」

「そう、私で」

「ジークフリートなのですね」

「私を生んでくれた母さんに祝福を」

彼は言った。

「私を育ててくれた大地に祝福を」

「そう、祝福を」

「この幸せに微笑みかける瞳を見るくことができるのだから」

「私への眼差しは貴方にだけ」  
ブリュンヒルテはそのジークフリートを見詰めていた。  
「貴方にだけ向けられるもの」  
「私にだけ」  
「ジークフリート」  
ジークフリートの名前を自分から呼んだ。  
「その名前を口にするだけで」  
「どうだというのですか？」  
「この上ない喜びに包まれる」  
そうなるというのである。  
「それに耐えられないまでに」  
「耐えられない」  
「そう、とても」  
その顔は何時しか微笑んでいた。  
「私も。これで」  
「これで」  
「私が貴方を愛していることをわかってってくれたら」  
「愛を」  
「そう、愛を」  
こう彼に言うのだった。  
「貴方は私の心だった」  
「私が」  
「そう、生まれるその前から愛していた」  
彼をというのだ。  
「愛していた。そして見ていたということ」  
「けれど私はそれは」  
「そう。気付かなかった」  
「そうだったというのだ。」  
「何一つとして」  
「けれどそれは仕方のないこと」

「仕方のない？」

「そう、しか他のないこと」  
「こう彼に告げるのだった。」

「何故なら貴方は今私に会って私を知った。けれど私は」

「その前からだというのですね」

「そう。その前から」

「そうだったというのである。」

「知っていた。だから今私は」

「貴女は？」

「貴方になります」

「私に」

「そう、なります」

「彼への愛の言葉に他ならなかった。」

「今それを誓いましょう」

「何と。私になつてくれるとは」

「歡喜の人」

「微笑んでいる言葉だった。」

### 第三幕その十

「ジークフリート、勝利の光」

「そしてブリュンヒルテ、貴女は私の」

「私はいつも貴方を愛していた」

彼のその両手を握った。

「そう、いつも」

「いつも私を」

「貴方を愛することこそが今の私の全て」

「何という言葉か」

ジークフリートもブリュンヒルテのその言葉を聞いているうちに  
恍惚となっていた。

「何という不思議な響きなのか。けれど」

「けれど？」

「私にはよく分からない」

こう言うのだった。

「貴女の瞳の輝きを明るく見る」

「私の瞳を」

「貴女の温かい息吹も感じる。歌声も甘く響く」

それでもなのだった。

「けれど貴女が歌いつつ教えてくれた言葉は驚くばかりだ」

「分からないのですね」

「そんな遠くの事柄はわからない」

彼はまた言った。

「私の感覚は全て貴女を見て感じるだけだ」

「それで充分なのです」

「ですが私は」

ここであの感情を思い出してしまったのだ。

「恐れを抱いている。貴女が教えてくれたこの教えを」

「ですがそれは」

「勇気が抑えられている」

こう感じていたのである。

「それはどうしても感じてしまう」

「そう考える必要はありません」

「ないというのですか」

「そうです」

これ以上はないまでに優しい声と微笑みで彼に告げるのだった。

「それはです」

「それは何故ですか？」

「あれを」

ここで後ろを指差す。するとそこには何時の間にか一頭の馬がいた。

「あれは馬です」

「馬、ですか」

「森には居なかった筈です」

このこともわかつているブリュンヒルテだった。馬は森の奥にはいないからである。

「あの馬の名前はグラーネといいます」

「グラーネですか」

「そうです」

「いい名前ですね」

半ば無意識のうちに出て来た言葉だった。

「それが馬の名前ですか」

「ええ」

「わかりました」

その名前を聞いて頷いたジークフリートだった。

「その名前は」

「あの馬はです」

グラーネのこと話すジークフリートだった。

「私と共に眠っていたのを貴方が目覚めさせたのです」  
「私ですか」

「はい、そうなのです」

「そうだと告げたジークフリートだった。」

「それでなのです」

「私が起こしたと」

「その通りです」

「馬を私が」

「また言うジークフリートだった。」

「ですがそれが何を」

「ワルキューレを護った盾が」

「ワルキューレ、盾」

「今のジークフリートの言葉は知っている声だった。」

「戦場を駆け巡るヴァルハラ乙女ですね」

「そう、盾は」

「私は使ったことはありません」

「それはないというのだった。」

「ですが聞いたことはありません」

「そうなのですか」

「そして兜も」

「それも指し示したのだった。」

### 第三幕その十一

「もう私も覆ってはくれません」

「もうですか」

「必要のないものになりました」

「それもですか」

「そして鎧も」

それもだというのである。

「私には必要のなくなったものであります」

「それも必要が」

「何故なら」

ブリュンヒルテはここで言った。

「貴方の勇気があるからです」

「私の勇気が」

「そうです。貴方は剣だけで来た」

このことを言うのだった。

「その剣だけで、です」

「このノートウングだけで」

「そうです。それこそが何よりの証」

ブリュンヒルテは言った。

「貴方がここに来るのに炎を越えましたね」

「はい」

そのことも答えるジークフリートだった。

「それもです」

「炎を恐れませんでしたね」

「ええ、それは」

全く恐れていなかったのだ。これもまた事実である。

「その通りです」

「ええ、それは」



「私は炎を越えました」  
「それが勇気なのです」  
「それこそがですか」  
「そうです」  
まさにそれだというのだった。  
「それこそがです。貴方の勇気なのです」  
「それが私の勇気だと」  
「何もかもを恐れることなくそして今恐れを知った」  
「それが勇気だと」  
「恐れを知ってこそその勇気なのです」  
ブリュンヒルテが言うにはそうなのである。  
「それがなくてはです」  
「勇気とはならない」  
「貴方は恐れを知り」  
「そして」  
「それを克服することができました」  
「それができるといふのだった。」  
「貴方ならば」  
「私にそれができると」  
「できます。貴方だからです」  
「それを確信しているのだった。」  
「それもまた」  
「そうなのですか」  
「そしてです」  
ブリュンヒルテはそのうえで話を変えてきた。  
「貴方は別の炎も感じておられますね」  
「はい、確かに」  
それはまさにその通りだった。  
「私は今心が燃え盛っています」  
「そうですね。それは私も感じています」

「そうなのですか。炎を」  
「貴方から感じています」  
「あの周りで燃えていた炎が消えました」  
「それは消えたというのだ。」  
「ですがそれでもです」  
「そうですね。その炎が私の中に」  
「貴方の胸の中に」  
「そして私は今願っています」  
「そうしているというのだった。」  
「この炎を消すことを」  
「炎をですね」  
「そうですね。炎をです」  
「また言う彼だった。」  
「消す方法は知っていますでしょうか」  
「はい、それは私が知っています」  
「微笑んで答えたブリュンヒルテだった。」  
「私だからこそ」  
「貴女だからですか」  
「そうですね。ですから」  
「微笑んで言うブリュンヒルテだった。」  
「私を受け入れて下さいますか」  
「私が貴女を」  
「そうですね。できるでしょうか」  
「はい、できます」  
「また答えるのだった。」  
「ですから私を」  
「ではそれでは」  
「その手を取ったジークフリートだった。」

### 第三幕その十二

「こうして」

「私の意識は乱れ知恵も黙ってしまっ」

ブリュンヒルテは何かを手を取られ恍惚となっていた。

「けれどそれでも貴方を」

「貴女の知恵は私への愛の輝きとなります」

「私の知恵が」

「ですが私は」

「そうです。どうか」

言葉を続けていく。

「私と共に」

「悲しい暗闇が眼を曇らせ光は消える」

そうなっていくというのである。

「周りが夜になり霧と黄昏の中から激しい不安が吹き荒びます」

「不安が？」

「恐れが迫り膨れ上がります」

その言葉が続く。

「私はです」

それに応えて言ったジークフリートだった。

「夜が閉じた瞼を包みます」

「瞼をなのですね」

「そうです。その束縛から逃れれば暗黒の闇も消え去ります」

彼は言った。

「暗闇から抜け出してです」

「そうして」

「見るのです、太陽が輝くのを」

「わかりました」

それを聞いて頷いたブリュンヒルテだった。

「それでは。ジークフリート」  
「はい」  
「私の不安を見て下さい」  
「貴女の不安をです」  
「私は永遠でしたし今も永遠ですが」  
「永遠ですか」  
「そうです。貴方の幸せの為にこそ永遠です」  
「そうだったのだ」  
「甘い憧れの喜びの中でこそ永遠なのです」  
「それは私によつてですね」  
「その通りです。ジークフリート」  
「彼の名を呼んだ。」  
「素晴らしい人、世界の宝」  
「私が宝」  
「大地の命、微笑む英雄」  
「その彼を讃える言葉だった。」  
「私から離れて下さい、近付かないで」  
「それはどうしてですか？」  
「貴方に触れられただけで壊れてしまいそうです」  
「だからだというのだった。」  
「ですから」  
「私に触れられると」  
「そうです。もうそれだけで」  
「言葉がまた恍惚となっていた。」  
「私はそれによつて壊れてしまいます」  
「まさか。そんな」  
「いえ、そうです」  
「そして言うのであった。」  
「澄んだ小川で自分の姿を見たことはありませんね」  
「それは」

「ありますね」

「はい、そうです」

それはあるというのだった。

「それが何か」

「その中に手を入れてかき回すとです」

「かき回すと」

「その水面が砕けてなくなってしまいましたね」

そうなってしまつと。ジークフリートに告げた。

「だからです」

「離れよと」

「そうです。愛を自分に向けて私から離れて下さい」

そうせよというのだ。

「それによって貴方の宝を駄目にしないで下さい」

「私の宝を」

「ですから」

「私は貴方を愛します」

ここでこうブリュンヒルテに返したジークフリートだった。

### 第三幕その十三

「何があるうともです」

「何があるうともですか」

「そうです。ですから」

そのうえで言葉を続けたのだった。

「貴女も私を愛して下さい」

「私が貴方を」

「そうです。何があっても」

ジークフリートの言葉が強いものになっていた。

「貴女さえ得られれば」

「私が」

「私というものはありません」

「どういことですか、それは」

「素晴らしい小川が目の前にあります」

彼もまた小川を話に出してきた。

「私はそれを眺めています」

「その小川を」

「その素晴らしくうねる波を」

見ているというのである。

「私は見えています」

「その波を」

「私の姿が崩れれば燃え上がる炎を」

言葉が続けられる。

「私自身で燃え立たせそのうえで流れて冷やそうと」

「どうされるのですか？」

「小川の中に飛び込みます」

さらに言う。

「その大波が私を飲み込み」

「貴方を」

「流れの中に憧れが消えればいいのです」

言葉は恍惚としたままだった。

「ですからブリュンヒルテ」

「はい」

「起きて下さい」

言葉がかけられる。

「乙女よ、起きて」

「私が起きて」

「そして生きて笑うのです。甘い喜びの中で」

「私が貴方と共に」

「そして私のものとなって下さい」

熱い目で彼女を見ての言葉だった。

「どうか」

「はい、ジークフリート」

恍惚となって返したブリュンヒルテだった。

「私は前から貴方のものです」

「そう言ったださるのなら」

「どうぞだというのでしょうか」

「今私のもものになって下さい」

これもジークフリートの心の言葉だった。

「是非共」

「はい、では」

そして言ったブリュンヒルテだった。

「私は永遠に貴方のものになります」

「なるであろうものに」

ジークフリートもここでまた言った。

「貴女は今なったださい」

「私がそれに」

「私の手で貴女を捕らえ抱き締めます」

「私がなのですね」

「はい、では」

言いながらジークフリートの方に歩み寄った。

「今から」

「我が胸を激しく貴女の胸に押し付けます」

言いながらブリュンヒルテを見続けていた。

「目と目が互いに燃え上がり熱い息が弾みます」

「私を見てそれで」

「それで貴女は私のもになります」

彼は言った。

「私の不安は過去にも未来にもありません」

「そして現在にも」

「そうです。何故なら」

ブリュンヒルテにまた告げた言葉は。



### 第三幕その十四

「ブリュンヒルテは私のものかどうかという燃えるような心配は消えました」

「私は今から貴方のものなのか」

ブリュンヒルテも言った。

「神の静けさが我が身の中に波立ち」

「そして」

「最も純潔な光が灼熱に燃え上がります」

「私の手によつて」

「そうです。貴方の手で、です」

お互いに熱い目で見合っていた。

「天上の知識は私から消え去る。愛の歡喜がそれを追い払ったので  
す」

「愛の歡喜が」

「そうです。私は今貴方のものなのか」

そして彼の名を呼んだ。

「ジークフリート」

「はい」

「私が見えますか」

こつ彼に問うのだった。

「私があまりにも見るので目が見えなくなっていますか」

「その目がですか」

「そうです。私の腕が貴方を押し付けても」

その手をジークフリートの前に出した。

「私の手が貴方を押し付けても貴方は燃え上がりませんか」

「その炎で」

「そうです。私の血が今」

恍惚となつた言葉が続く。

「奔流の様に貴方に向かって流れ出した」  
「それを」

「その激しい炎を感じませんか」

ジークフリートに対して問う。

「ジークフリート、貴方は私を恐れませんか？」

「私をですか？」

「そうです。この野生の激しい女を恐れられないのですか」

「血の激流に火が点いた時」

ジークフリートはそれに応じて述べた。

「眼差しの輝きが己を苛んだその時」

「その時は」

「私はです」

言葉を続けていく。

「眼差しの輝きが己を苛んだ時」

「その時には」

「腕が激しく固く抱き締めたその時には」

言葉はもう自然と出されていた。

「私の大胆な勇気がまた私に戻って来ます」

「私がその勇気だというのですね」

「そうです」

話はそう移っていた。

「一度も習えなかったその恐れを」

「恐れを」

「貴女が教えてくれたばかりのその恐れをです」

「恐れを」

「愚かな私は全く忘れてしまいたいのです」

熱い言葉で語ったのだった。

「それをです」

「その言葉こそがです」

ブリュンヒルテは微笑んでその言葉を受けたのだった。そうして

また告げた。

「私はです」

「貴女は」

「子供らしい英雄、素晴らしい若者」

彼を評した言葉だった。

「貴方は気高い行為の愚かな宝です」

「それが私なのですね」

「そうです、貴方なのです」

まさにそうだというのだった。

「まさにです。ですから」

「ですから」

「私は笑いながら貴方を愛さなければならぬのです」

「私をですか」

「そう。そして」

恍惚とした言葉はさらに強いものになってきた。

### 第三幕その十五

「私は盲目にならないといけないのですね」

「それは何故ですか？」

「愛の為にです」

その為だというのだった。

「私は盲目にならないといけない、笑いながら微笑んで」

「微笑んで」

「滅んでいくのです」

今言った言葉は。それであった。

「それが私の願いです」

「貴女の」

「ヴァルハラに輝く世界よさようなら」

ヴァルハラに別れを告げた。

「誇りの城よ、粉々に砕けよ」

砕けよと。そうして。

「光り輝く神々の壮麗さよさらば。永遠の種族よ」

さらに言っのだった。

「歓喜のうちに終焉を迎えるのです」

「全てがですか」

「そう、全てがです」

言いながらも今見ていたのだった。歓喜の中での滅亡を。

「ノルン達よ運命の絆を断ち切れ」

「時の糸を」

「そう、それもです」

その言葉を続けていく。

「神々の黄昏よはじまるのです、破滅の夜よ」

「夜もまた」

「湧き上がるのです。そして」

「そして」

「今はジークフリートの星が輝くのです」

神々を捨ててだった。ジークフリートを見ているのだった。

「彼は私に永遠のものでそして」

「そして」

「全ての宝で唯一で全て」

言いながらさらに恍惚となっていく。

「輝く愛で微笑む死です」

「微笑みながら目を覚ました」

「今度はジークフリートが言ってきた。」

「素晴らしい人よ」

「私への言葉ですね」

「そうです。ブリュンヒルテは生きています」

「そう言っただであつた。」

「ブリュンヒルテは笑っている」

「私が」

「我々を照らす昼に祝福を」

「貴方もまた」

「そうです。ブリュンヒルテの生きているこの世界に祝福を」

彼女と世界を讃えていた。

「彼女は目覚め生きています」

「私がそうして」

「そうです。私に向かつて微笑みかけています」

それは彼も同じだった。

「私に向かい微笑みかけてくれるブリュンヒルテ」

「私が」

「光り輝くブリュンヒルテの星よ」

あくまで彼を見ているのだった。

「彼女は私にとって永遠のもので」

「貴方もなのです」

「そうです。全ての宝で唯一であり全てであります」

二人は見詰め合っていた。これ以上はないまでに。

「輝く愛であり微笑む死です」

「貴方は私で」

「貴女が私で」

二人は同じだと。確かめ合っていた。

「そして永遠に」

「そう、永遠に」

「微笑みましょう」

「この輝かしい死に」

炎は消えその中で微笑み合う二人だった。二人は運命の出会いを果たした。そしてそれはまさに黄昏と曙のはじまりなのであった。

ジークフリート 完

2009・11・20

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9498n/>

---

ジークフリート

2011年4月28日00時58分発行